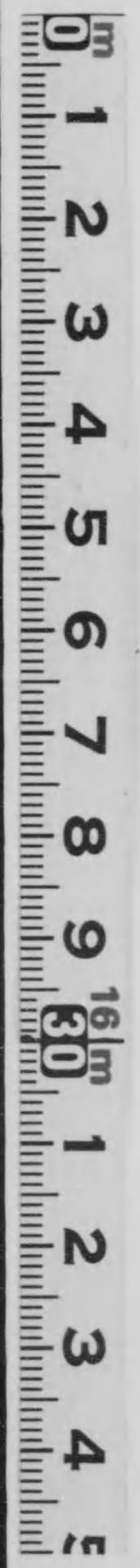


279.5
49



始





山本瀧之助著

幹部の修養

大正

14.6.23

丙亥

日本青年館發行

279.5-49

自序

幹部に就いては、わたくし自身がそれに立ちたいと始終思つて居りますので、
断に聊か考へもし亦多少心懸けて見ても居りました。

幹部は青年團には限りませぬが、既に青年團の幹部である上は、青年團に就いて
先づ一通りの理解を持つことが大切であります。初めに青年團の事を少し書きま
した。

まことに小冊子であります、骨を折つて作つたものであります。

大正十四年四月十五日

著者謹識

目次

一 青年團とは何ぞや

一 其の狀態

置業の類が粘氣のない糯米時間と共に盡く遠重近輕町村と青年團家庭
と青年團親年寄の選奨狀自體は如何五萬人に一人マダ不充分。

二 其の根據

社會が入用踏み違へる場所其處へ附け込んで友達を得させる爲三つの中
に亦三つ家庭内の社會父親の延長團中の團兄弟と青年團家庭青年團
二人とも走る教場よりも寄宿舎兄弟と舎と團整と團と横。

三 其の價值

好一荷多くは意志親辛抱神武天皇今正に三代目足は元氣後足が大事
人物は後足よりイザといふ場合眞の進歩元氣の貯藏場圓の中に十字字。

目次

二 幹部とは何ぞや

一 其の地位

樹の幹 下士 役員 職員 議員 主婦 神經 骨 中心 中堅 幹部と指導者。

二 其の使命

上意下達と下情上達 目から入る 感情と勘定 不言の號令 聲から聲へ 訓令の塵拾場 下飾 觀 砂上の囁語 お米を下さい 式辭不徹底 數が少い 母親と子供 反射運動 骨の立場 體を成す 上中下 反抗文明 自桓武天皇 相合して國本 家族制度は幹部制度 横とは夫婦 無階級 肝煎 女房の奉 骨のない扇子 腹を切る 下士集會所 篤志者 版頭 地天泰 資本主の代官 どうか描く積り 上下を牽制 文化線 世界の幹部 字書を繕いて。

三 其の修養

意志實行の範圍内 鐵砲轟 知識の作用 上知と下意 關 四門 煎豆を掴んで 據つて立つ所 鯉の瀧登り 幹部候補生 意志と芽立 小早起 出て立つ 實

行の足跡 臨終刹那の夕 眞中を避けて 心持ちだけでも ヤア御苦勞さん 先づ團員 獨學自修研鑽 往空歸實 水滴が残る 惜しいこと 上からも下からも 小聲で歌ふ 悪事をも行ふ 鐵が鐵頭鐵尾 相手になる 春宵臘月 牛熱を尊ぶ 溝もない 山上生活 オットこれは大臣 幹事の食事 下士の髯 一本四圓五拾錢 大儀がる 二葉の投宿氏名票 人に親み世に接す 一步後退 新に十八日 破れてゐる 嫌です 好事不 知 無 別して不 致事 一の字 急緩得 中 従つて太る 低い受附口 畢竟有官の太夫 弱さうで強い 湯漕の教 不動尊の願 終日馬になつて 先きに言ひたがる 本眞劍の父兄 親達も亦喜ぶ 今一尺で出る水 十室の邑 半ば帆を巻いて 先づ帽子に手を懸けて 針の尖を眺めて 粟畑の雀を追うて ステツキを庭に探りて 五衰 中の字。

四 其の將來

キリストも幹部 親鸞上人は終に佛 元來同格 諸器官を着せしむ 明方を求めて 認印を手にして 櫻花の下に立ちて 永遠の生命。

附 録

地方に於ける幹部の養成……………一五二

一郡一個所の高等小學校 幹部教育と中等學校 鳥高く飛んで 最初の巡回學校
 十八歳以上 吸口と雁首 優真兒童 町村に入營 五日間山寺に 日々に疎い
 不真少年と真少年 言葉をかけるだけの親切 五百五十九名 方針さへ立てば
 決して無理でない 此の兩者。

幹部の修養

山本瀧之助著

一 青年團とは何ぞや

一 其の状態

置薬の類か



青年團は當初何の爲に出来たか。小學校卒業だけでは物足らない。さらばこいつて、十人が
 悉く揃つて上級學校に就くワケには行かない。何ぞかして今少しなりと勉強もし修養もしたい。
 其の何ぞかに對して青年團は出来たこいふか。果してさうであれば、補習學校の略は行き渡つた

一 青年團とは何ぞや

一

今日、ソロ／＼青年團不必要論が見られる筈である。補習學校は今の所マダ／＼内容が完備してゐないさうか。然らば、今後補習學校の内容が充實するか、但しは又中等學校が普く設けられて十人が悉く揃つて中等教育に就き得る曉が来たならば、其の際は最早少しも青年團に用事はないさうか。果してさうであらうか。

若しさうであれば、青年團は富山の置薬に類したもので、中等學校さういふ『醫師の来るまで』の壽命なのである。醫師の来た上は多く置薬に用はない。中等學校の来た上は最早青年團に用はない。青年團は本來ソナに根の浅い影の薄いものなのであらうか。

粘氣のない糯米

今更ら『青年團は何ぞや』でもあるまいやうに思へる。併し強ちさうでもないらしい。今ここで、『青年團員たるの資格如何』を尋ねて見たとする。年齢を以つて、又は居住地を以つて答へるであらう。併しソナものは言はばドウでもよい。最も大切な唯一の資格さういふべき程のものは、必ずや團員自身が『一通り青年團を理解して』衷心よりして青年團の必要をよく自ら納

得してゐるこゝでなくてはなるまい。

學校は生徒で作られてゐない。生徒が學校なるものを理解してゐれば此の上はないが、無理解であつても學校は成立つ。學校は教師に依つて作られてゐる。之に反して、青年團は其の名の示す如く青年それ自身の團結である。青年同志が相集まつてこゝに青年團なるものを出来してゐる。青年の青年團に於けるは、尙ほ糯米の餅に於ける如し。糯米にして粘氣が無かつたならば、終日白に入れて搗くも決して餅にはならぬと同様、青年にして青年團に對して無理解であつたならば、假りにいくら集ひ合つたところで眞の青年團の出来上る筈はない。出来上らなければかりではない。青年團を理解せないので、何等の期待を有せないものが、何で當初からして青年團なるものを作らうなき、志さう。志す筈がない。

時間と共に盡く

全國青年團の数は萬千を以つて數へられてゐる。此の内果して幾何の眞青年團が存するか。團員にして資格を有してゐたならば、萬千の青年團は孰れも眞青年團である。團員にして無資格で

あつたならば、萬千の青年團は孰れも有名無實である。有名無實とは、名は青年團であつて、其の實は青年會であるといふことである。所謂青年會とは、青年間に於ける一時の會見、面會、會合に過ぎないものである。總會を開き、體育大會を催し、雄辯大會を行ふも唯因習的に臨時にこれを開き、流行的に偶これを催すといふに止まつて、面會が濟めば左様なら西に東に離れる如く、時間が盡きると共に青年團が盡き、大會が終はると同時に青年團が終はるのは、名は青年團であつて、實は青年會である。今日の青年團の多くは、ドレ程不斷に團員の頭の中に青年團なるものが働き、ドレ程青年團なるものが三百六十五日に涉つて常任的になつてゐるであらうか。團であつて會であるといふは、亦青年團の多くが今尚ほ借屋住ひであるといふことでもある。既に自分達が眞の家主でないから、團に對する愛欲の念も執着の心も共に薄い。今日限り青年團を解散するにしても、借屋が焼ければ借屋住ひの者でもさし當り迷惑するが、今日多くの青年團は、トテも借屋が焼けた程の痛痒を感じないではあるまいか。

遠重近輕

今日の青年團は如何にも遠重近輕の嫌ひがある。無資格者の集ふ所自らさうなつて來る。遠重とは、遠方からはカナリ重んじられてゐるといふこと。近輕とは、近傍からは其の割合に重んじられない、或は輕しめられてゐるといふことである。外に出れば肩身は廣いが、内に歸れば其の姿が如何にもミスボラシイといふのが青年團の状態ではあるまいか。

町村と青年團

青年團に取つての遠方とは、さし當り内務文部兩省である。兩大臣連署の訓示といひ、亦兩大臣の選擧といひ、大日本聯合青年團の設立、日本青年館の建設、乃至度々の全國大會といひ、大臣の招待會といひ、青年團は中央に出では確に其の存在を認められてゐる。然るに府縣より郡市ご段々内輪に入つて、更に親しく其の町村内に就いて見るに、町村は果して青年團に對してドレ程の期待を有つてゐるであらうかと思へる。文部省印行の「表彰青年團一覽表」に就いて見るに明治四十三年以降大正十年迄の間に於いて、各方面から表彰を受けた青年團の数は百千に止まらない。トテも數へ切れない程であるが、其の表彰は、總べて文部省、内務省、府縣、郡市からの

ものであつて、町村表彰のものはタゞの一つも見當らない。既に郡市以上から表彰される程であれば、町村からは其の以前に表彰される筈のものである。右一覽表は、初めからして町村表彰を度外に置いて調べたものかも知れないが、併し、實際に於いて町村は眼中に左程青年團なるもの存在を認めてゐないのではあるまいか。

或一人がさる村の講演會に招かれて、青年團に就いて一二時間話して歸つた。數日を経て團長がお禮に来て、『お蔭で助かりました』といふ。様子を聞いて見ると、『青年團などに對して大切な村費を補助する必要はないといふので、今年の村會では補助が削減の運命になつてゐまし

た。然るに講演會席上青年團に就いてのお話を承つて、丁度其の席に有力な二三の村會議員がゐましたので、餘程感じたものと見え、どうやら補助も従前通り貰へるらしい模様』と云々。而して其の補助といふは、實に年額五圓なのである。

家庭と青年團

假りに、青年團は町村から輕しめられてゐる。併し、町村はマダ結構である。モット近い家庭は、青年團に對して果してドンナ態度であらうか。コゝにこそ紛れもなう近輕を實現して

ゐるではなからうかと思へる。青年團さういふも所詮は團員である。團員即ち宅の息子である。其の宅の息子を抱いてゐる家庭は、果して如何なる程度に於いて青年團の存在を認めてゐるであらうか。

或る一人が、全國に名高いさる縣の青年團を視察して、驛から下りて其の村に近づかうとする時、途上偶々其の村の父兄の一人と道伴れになつた。斯る立派な青年團を持たれるとは、村の誇であつて亦皆さん父兄方のお仕合せであると挨拶した。然るに其の時其の父兄は、如何にも餘所々々しく、『近頃は青年會とか青年團とかいつては、若い者を度々學校へサバリ出されて困つて居る』云々と、自ら冷笑して答へた。

亦或所で、一人のお母さんが廳先きに出て、隣家のお母さんと呼んでいふやう『今夜クラブで若い衆の寄合ひがあるさうです、昇さんにさう言つてつかあさい。言ひ傳へじやさうですからお隣りへもさういつてつかあさい』。前の路を

通りながら聞くともなしに聞いて見ると青年團の案内らしい。これを受けた片方のお母さん『へいお世話さんでございまして』といつたアトで獨言らしう『何が用があるのか知らんが、よう再々寄合をしたものじや』この獨言を直ちに引き取つて先刻のお母さん『サウ／＼やつぱり仕事が出来ないから、何とか角とかがいつては遊ぶことばかり考へて居ります』

青年團、處女會などの講師として、年中各地を巡つてゐるさる一人が、久しぶりに國に歸つた。これを迎へて其の父なる人の言に『外で働くことも結構であるが、時々は國に歸つて見るとよい。此の邊りなどでは、親達も青年團には頗る不平を溢してゐる。運動會とか競技會と

かいつては、飛んだり刎れたり、駈けることばかり稽古する。雄辯會とか能辯會とかいつては、理窟をいふことを稽古する。イ、加減青年團に

は困つてゐる。それに近頃は亦處女會などいって、若い娘の子までも外へ引き出さうとする。親達は眞にコンナに言つてゐるぞ」と。

町村表彰の青年團は少い。併しモット少いのは家庭表彰の青年團であらう。眞に親年寄から青年團を徳こして、青年團に就いて喜んで貰つてゐる向きが、果してドコに幾つあるであらうか。

親年寄の選奨状

一本の大根に取つては、大根を中心に方四五寸以内の土が最も大切である。青年團にあつても亦同様最も近い家庭が最も大切である。三十間四十間さきの土の肥へてゐることも、結構なこぢではあるが、一本の大根に取つては左程の痛痒を感じない。遠方から譽められることも望ましい。併し眞に力になり得るのは、近所から認められるのである。「けふは青年團の總會であるといつてゐたではないか、仕事はいつでも出来る、早く足を洗つて行かないと時間に遅れようぞ」。親年寄の此の聲は、これこそ眞の表彰状、眞の奨励金である。足を洗つて早く行きたいと思つても、

父兄の手前を憚つて行き兼ねるやうでは、いつまで経つても青年團の基礎は決して据はるものではない。あるまい。

大臣の表彰よりかも知事、知事のよりかも郡市長、それよりかも町村長、それよりかもモット有力なのは、恐らく家庭よりのものであらう。青年團の後援者としては、細かに町村長、小學校長、學校職員、神官僧侶、在郷軍人會長、巡査、醫師などを數へられてゐる。が併し、是等以上に最も有力な眞の後援者は、恐らく父兄なのであらう。然るに此の大切な家庭、此の重要な父兄が、左程青年團を認めないことは、青年團に取つて眞に大きな問題でなくてはなるまい。

自體は如何

假りに、家庭は青年團を輕しめてゐるにしても、家庭はマダ／＼結構であると思へる。モット近く寄つて、青年團自體が（これ程近い所はない）然らば青年團に對してドレ程の期待を有つてゐるであらうか。篤く自ら省みて見たいと思ふ。口でこそ青年團を繰り返して居れ。眞實心の底を探つて見たなら、青年團なきいふも、先づい、加減のものしか思つて居ないのである

まいか。唯附いて流れにワイ／＼言つてゐるに過ぎないで、果して眞にドレ程突き留めた考へを持つてゐるであらうか。青年團から離れたからして何等の苦痛も感じない。寧ろ離れようと思望んでゐるではないかとも見られる。それで尙ほ青年團が廢れてしまはぬのは、寧ろ不思議なことであるが、それは青年團が其の初め、數百年來の歴史を持つてゐた『若連中』に其の土臺を置いたお蔭なのであらう。青年團自體が青年團を輕しめてゐる。これが所謂金看板の近輕なのである。

五萬人に一人

自ら侮つて人これを侮る。家庭が輕しめるのも、町村が認めないのも、畢竟は青年團自體が自ら輕しめ、自ら認めないからである。幸ひに遠方から重んじられてゐるこいふも、遠方からは『斯うある青年團』は見えないで、唯『斯うあるべき青年團』として、遙に先きを見越しての所謂遠重であらう。併し其の亦遠重でも、よく見れば多寡の知れたもので、堂々たる文部省、内務省の選奨に、其の獎勵金は三十圓乃至五十圓、精々百圓を出ないのである。昨年中(大正十三年)

の新聞記事に『二十八日の閣議に於いて文部省所管、コペンハーゲンに於いて開催の國際少年團日本聯盟事務費補助金五萬圓の責任支出の件を決定した』とあつた。青年團は既に二十年三十年來の出來事ではないが、國庫から一時に五萬圓を支出されたことが一度でもあつたであらうか。いづれの府縣でも、中等學校生徒に對しては、一人一個年二百圓乃至三百圓の府縣費を使つてゐる。青年團員に對しては果して幾何を使つてゐるであらうか。『俺の縣には、中等學校生徒男女六千人、これに對しては四百人の専務指導者(學校教員)が居る。一方縣下青年團員處女會員數五萬人、これに對して専務の指導者は唯社會教育主事一人である』と云々。帝國議會の議に、青年團の事が上つたを餘り聞かない。同様に、府縣會で青年團の事が議せられたことを餘り聞かない。

マダ／＼不充分

青年團は遠重近輕ではない。遠輕近輕である。斯くの如きものは、一に青年團自體が自ら輕しめるからである。青年團は既に背丈け伸びたもの、集りである以上、家庭の理解が足りない、町

村の態度が冷淡である。他が認めて呉れないから充分に伸びられないが、徒に他に求めないで、ドコまでも責任を内に歸して、自ら理解が足りない、自ら冷淡である。ここを自業自得せねばならぬ。

身修而後家齊。家齊而後國治。國治而後天下平。自天子以至庶人。一是以修身為本。
(大學)

二 其の根據

社會が入用

人は誰も先づ家庭が入用である。次いで學校が入用である。家庭で育てられ學校で教はる。併し同時に亦社會が入用である。社會とは友達の謂である。立派な親を持たねばならぬ。立派な教師を持たねばならぬ。併し同様に亦立派な友達を持たねばならぬ。今姑くこれを子供に就いて見るに、子供は時に親を欺き教師に嘘を言つてまでも、友達の約束に従はうとする。友達の互に及ぼす力は眞に恐ろしいものがある。

踏み違へる場所

こちらに親の居る家庭がある。向ふに教師の居る學校がある。此のこちらの戸口から、向ふの學校の門際までの途上は、これは家庭の親の手も届き兼ねる。又學校の教師の力にも合ひ兼ねる。

此處は子供即ち友達同志が氣儘の境地なので、善い事も悪い事も、互に教へたり教はつたりする。子供は家庭又は學校内でも道を踏み違へる。併し最も多く道を踏み違へる場所は、屋外又は校外の途上にある。今實際に就いて見るに、不良少年の原因は、其の大多数が途上に於ける悪友の感化にある。(わたしの縣で曾て調査されたものを見ると、縣下三百七十六名の不良少年の中で、第一位の一百一名は『悪友の誘惑』であつた。)次に活動寫眞の悪影響がいづれでも多い。(わたしの縣でも二位の七十名はそれであつた。)然るに此の悪影響を受け易い悪活動寫眞は、誰に共に見物に行くかを見るに、曾て或人が大阪市内二十五校に就いて、子供の娯樂を研究した際、『活動寫眞館には誰に行くか』との問ひに對し、最も多かつたのは實に『友達に行く』といふのであつた。

其處へ附け込んで

斯くの如きは獨り子供に限らない。寧ろ年長するに連れて益々友達が大切になつて来る。年長するに連れ學校から離れる、親子の縁も薄らいで来る。いくら親子でも、子が背丈伸びるに、子供の時は吐かない、言ひたいことも控目にする。八釜しく吐つてくれる親、教師がなくなる。

るに、其處へ附け込んで其の力を逞ふするのが友達である。親、教師との縁が薄くなるに比例して、友達との縁が厚くなる。

友達を得させる爲

英國の有名な大學の入學式を見て來た人の話に、總長の式辭に述べた所は、先づ校友會の規則であつた。此の學校には斯ういふ組合もあれば、ア、いふ仲間もあるといふので、唯それ等を紹介するの外、別に一言も訓示らしいものがなかつた。ミ。學校に入れて、教師から授かる所は或は多寡の知れたものであるかも知れない。友達同志學びの窓を同うして、互に勵み勵まされて、其處に生み出される力が恐らく最も大切なものであつて、子供を學校に入れるのは、子供をして立派な友達を得させる爲であるとも言へよう。

『可愛い子には旅をさせよ』、『人は人中』といふ。所謂人中ミか旅ミかは、畢竟是れ友達同志の作用を指すものである。友達に就いての格言は、其の數に於いて親又は教師に就いてのよりかも多いらしい。

一時性教育が唱へられた、所謂性教育は家庭又は學校内では容易に行はれない。然るに誰も年ごろになれば、別に教はらないで色々の事を覚えて来る。親からも授けられない。教師からも教はらない。これは全く友達から傳へられるのである。何々青年大會の開かれた際、數人の青年が一團となつて赴いてゐた。後の方から一人の先輩が跟いて来てゐるとは氣附かいて、夢中

になつて話してゐたは、全く性に關する教材であつた。最も徹底的に盛に相互教育を行つてゐるのであつたが偶後に人あるを知るや、一團は悲鳴を擧げて頭を抱へたまゝ眞に雲を霞と一目算に逃げ走つた。大會席上に於ける名士の講演よりかも、斯うした途上の相互講演の方が遙に素直に受け入れられるのである。

三つの中に亦三つ

家庭に學校に社會に、親に教師に友達に、此の三つの内其の一つを缺いても人は充分に育たない。併し、多い人の中には、家庭は持つてゐるが、不幸にして學校を持たないものもある。友達があつても親がないものもある。それ故、たゞ學校は持たなくても、家庭はなくても、三つの内其の孰れかの一つさへ持つてばたゞ不充ながらも他の二つの者をも間に合はせる様に、三つの者の中に、亦各三つを含まされてゐるのである。

家庭内の社會

先づ家庭に就いて見るに、家庭の中に家庭に學校に社會にがある。家庭の中の家庭は母が主人公であつて、お臺所がそれである、感情方面である。家庭の中の學校は父を主體として床の間お座敷がそれである、知識方面である。家庭の中の社會は兄弟が中心であつて、縁側又は庭先がそれである、意志方面である。

父親の延長

父親の延長したものが學校である。それ故、家庭が感情中心であるに對して、學校は自ら知識中心である。學校に於ける教場は、家庭に於ける床の間又はお座敷である。更に學校中の家庭は、先づ女教員を中心として、湯飲場あたりがそれに相當しよう。

親しく外國の小學校を視察して歸つた人の話に、あちらでは、校長住宅が屹度小學校の校舍にクツつけて建てられてゐる。内に入つて見ると、ドコまでが學校であつて、ドコからが住宅

であるか限界が見えぬ。又校長の妻君は屹度其の學校の教師であつて、夫婦二人がかりで、生徒の爲に父となり母となつてゐる、と。

斯うなれば學校中の家庭を見出すに少しも苦まないが、學校即ち教場こいつたやうに餘りに知識一方に流れてゐるのでは、學校中のお臺所が却々探し出されぬ。過ぐる頃『大學生のお母さん』こ大きな活字で左の新聞記事が見えてゐた。

大學生のお母さん

京都帝國大學では今回荒木總長、鈴木學生監の上京交渉の結果、新しい企てとして、二人の女性を學生監の補助として採用し、兎角家庭を離れて異郷の空に故郷の母を偲ぶ學生達の温かさ相談相手をするに於て、右に就き鈴木學生監は語る。

どうも男が監督するのは不十分な點が少くない。何とか適任者もがなと物色してゐたので

あるが、今回兩女史を得た次第で、これから大學の母として萬事手助けをして貰ひ、家庭を大學まで擴張する計畫だ。まだ日は浅いのであるが性の問題、金錢の問題、家庭との連絡その他總ゆる煩悶に就て、段々と相談に出掛けるものもある様だ。何分にも日本で最初の企てでもあるし、他に率先して始めたことでもあるから、折角所期の目的を達したいものだ、云々。

學校内の社會は、云ふまでもなく生徒相互であつて、廊下又は運動場がそれである。中等學校以上に就いていへば、其の最も完全なものが彼の寄宿舎である。

團中の團

飄つて社會に就いて見ると、社會にも亦同様此の三者が備はつてゐる。今青年に就いていへば、青年の社會是が即ち青年團である。處女の社會は處女會である。少年の社會は少年團である。されば、青年團には青年團中の青年團をはじめとして、其の中に尙ほ家庭を學校を藏してゐる。青年團中の青年團は團員を主體とするはいふまでもない。團員は學校に於ける生徒、家庭に於ける兄弟に相當して、青年團は元來意志中心のものである。施設の上に就いていへば例會、總會申合實行の類がそれである。青年團の學校方面は、指導者がこれに當つて、施設に見はれては、補習教育、講習會、文庫など、なる。更に其の母役として青年團のお臺所に据はつて家庭的方面の中心となつてゐるのが幹部である。團員が集ひ合つて、一つの釜の御飯を食べ、一つの床に休む彼の『一夜講習』如き催しは、全く青年團の家族的施設なのである。

兄弟と青年團

三つの者は皆大切である。それ故、三つの者の中に亦各三つの者を備付けてゐる。若し、家庭さへあれば學校は無くてよいといふのならば、母親さへあれば父親はなくてもよいといふことである。若し、家庭に學校さへあれば社會即ち青年團は無くてもよいといふのならば、両親さへあれば兄弟は無くても差支がないといふことである。學校に就いていへば、生徒は少いだけが良い。生徒は唯一人なのが理想的であるといふことなのである。

兄弟は果して無いかよいであらうか。これは直に青年團に對する信任投票である。若し、兄弟は無いがよいといふのならば、恐らく青年團は根柢から成立しないであらう。誰も、家庭に學校、父母兩親の大切なことは充分に承知してゐる。獨り社會即ち兄弟に就いては、左程考へられてゐないのであるまいか。

今學者(ホフマン氏)の研究に依つて見るに、

- 一、獨り兒は、何の點から見ても、健康に活力に於いて確に平均以下にあつた。
- 二、神經に關する疾病は、獨り兒の家族中には極めて普通のやうである。
- 三、友人に交際する場合に、普通兒童に對し自製の力乏しく、他の者等と軋轢ばかりしてゐる。

る。

四、獨り兒の入學は、普通兒童より遅れ、其の出席も亦不規則のやうである。

五、異常の早熟は普通である。

六、獨り兒は、大抵實際の友人の不足を補ふために、想像的の友人をこしらへる事にばかり腐心する。

七、我儘は獨り兒の最も悪い性癖のうちに、愛情深きは最も美しい性癖のうちに屢々數へられる。

八、一般に家庭に於ける取扱は、無遠慮に放任されてゐる。

報告材料を供給した人々の殆んど同様に一致してゐる點は放縱をモット大に減じ自制力を費はねばならぬ。この種の兒童はいつも兩親や他の年長の人々と一緒にばかり置いてはならぬ。彼等と同年の兒童と成るべく一緒に居らして、他の者等とドンナ風に仕事をして行くべきか。他の者等にドンナに服従して行くべきかといふことを學ばしめねばならぬ。兩親の必要もなき心配と動物的の寵愛とは止めて仕舞はねばならぬ、こ。

又別の學者(ガルトン氏)の調書に據るに、

- 偉人百人につき長男は 十七人
- 次男は 三十八人
- 三男は 二十二
- 獨り兒は 十一人

こある。惣領は由來「甚六」である。

家庭青年團

兄弟は有つて欲しい。これは當初からさうあるべきことである。父は知であつて母は情である。然るに、人は誰れも知情のみでは育たない。言ひ換へれば、人は誰れも知情のみでは生きてゐない。今一つ大切なのは意である。而して此の意は元來兄弟間の物である。「兄弟角力」さういひ「兄弟喧嘩」さういひ、「子福者の毎夜寢床の境論」さういふ。兄弟角力は家庭青年團の體育大會であつて、喧嘩は競技、境論は雄辯大會である。斯うした間に、兄弟角比べしつ、互に力づけられて伸び

て行く。昔から「子三人」又は「七人の子」さういふ。三人か七人の兄弟があつて欲しいさういふのである。「貸さず借らず子三人」。「子七人喚ぐ枯野の小家かな、枯野は淋しい。小家も淋しい。其の淋しい中に、子七人ゐることに依つて初めて賑はつて、一陽將に來復しようとして、霜雪に閉されながら、ムク／＼と頭を擡げる根強い芽立の面影を見せる。然るにそれが「子一人」然るして枯野の小家かな」では、到底見込みはない。

子三人といひ、七人の子といひて、孰れも奇數を示してゐる點に注意したい。四人とか八人とかの偶數では、由來眞の團體は成立し難い。二人は可といひ、二人は否といつた時、結局は二人づゝに分離する。分離するも、二人と二人であれば、勢力に甲乙がなうて對抗され得るからである。然るに、二人に一人、四人に三

二人とも走る

人では、容易に分離されない。分離すると片方が負ける。容易に分離出来ない所に、色々の経緯が生じて團體の訓練も自らはれる。これを出來上つた團體は必ず鞏固である。三人七人は、家庭青年團の望ましい團員まで示したものである。

父親が佛壇に參つても、子供達は必ずしも參らない。然るに、兄が佛壇のお戸に手をかけれ

ば、弟は急いでマッチを摺つてお線香に火をつける。兄が起てば弟も起つ。弟が走れば兄も走る。兄弟連れ合つて歩いてゐるのを見るに、弟が先に行かうとするに、兄が手を廣げて先きに行かまいとする。兄が先きに行かまいとするに、弟が押し退けても先きに行かうとする。斯うして勢ひ二人も走る。兄弟の間からは意志が生れる。

今時、恐らく教師一人生徒一人を以つて學校の理想はせないであらう。現に教場内に退々廊下を取り入れようとして、教壇に面して一様に整列されてあつたこれまでの生徒の机は、近來漸く其の方向を轉じて、いくらかでも生徒同志相對せしめようとするのではあるまいか。「兒童本位」といひ「兒童の生活」といふは、概ね先づ兒童の自發自作を基として、子供同志をして互に生み出させて、教授よりかも、教師はこれに對して指導を行はうといふのであらう。

教場よりも寄宿舎

前にいつたやうに、寄宿舎は青年團である。而して此の青年團は校風もた、へられ學風も稱へられるもの、發祥地であつて、立派な校風を持つてゐる所には、屹度立派な寄宿舎が控へてゐる。

立派な人物は、學校の教場よりかも、寧ろ青年團である寄宿舎から産出される。たしか明治二十一年中のことであつた。第一高等中學校が初めて東西二つの寄宿舎自治寮を作つた際、時の木下教頭は宣言して「我が校の寄宿寮を設ける所以のものは、此を以て金城鐵壁となし籠城の覺悟を以て、滔々として日に壞敗に趣く世間の惡風汚俗を遮斷し、此の狂瀾の勢に抗し、純粹なる徳義心を養成せしむるにあり、決して徒らに路程遠近の便を圖り、或は事を好みて然るにあらざるなり」と。時の人はこれを傳へて木下教頭の籠城演説といつてゐた。慶應義塾寄宿舎規則第一條に「本寄宿舎は獨立自尊の主義に據り舎生をして高尚なる氣品を涵養し心身の發達を健全ならしめんことを期す」とある。義塾其の物の目的も恐らく多くこれ以上には出まい。松下村塾を追憶する時、學校としてよりかも青年團、教場としてよりかも寄宿舎として頭に浮び來るであらう。獨り松下村塾には限らない。昔の名ある潘學又は漢學塾などは、多くは皆同じであつて、廣瀬淡窓翁の所謂「休レ謂他郷多苦辛、同胞有友自相親、柴扉曉出霜如雪、君汲溪流我折薪」にあるがそれである。君汲溪流我折薪斯くの如きは教場内では見られない。

曩に「典型的の英國教育」と題して、左の記事が雑誌に見えてゐた。

一昨年の夏蘇國漫遊から倫敦に歸つたのは九月一日であつた。豫れてソマーセット州のバスといふ羅馬時代の浴室の跡を存せる一小市の郊外、モンクトン・グリーンム高等學校を參觀したいと思つて、知人の紹介で交渉を遂げて、同月廿五日倫敦を發し百哩の距離を二時間走つてバスに着いた。

校長カーン氏は温厚なる君子で牛津大學の出身である。牛津、劍橋、倫敦等の諸大學出身の學士等を同僚として中等教育に従事してゐる。生徒は百八十名内外で悉く之を寄宿舎に收容して、最も堅實なる品性陶冶の教育を施してゐるので、一夕校長夫妻と共に種々教育上の問題を談じた。その時私は、英國の學校では遊戯を以て青年修養の重要な基礎としてゐるさうだが如何なる意味であるかと試に問うたところが、夫妻互に答へて言はるゝに、吾々は多くラグビー式フット・ボールを遊ばすことであるが、あの

競技に於ては、競技者二方に分れて各々自分の側の爲めに戦友相互に助けあうて競ふのであるから、自然に共同一致の精神を養ふべく、又最後の勝を獲んとして戦ふ間に勇氣と忍耐の徳を練り、又一切教師の干渉なくして運動を終始するので、知らず識らず獨立自治と規律の精神とが訓練せられるのである。吾々の學校に於ては共同精神の發揮を重んずるが故に、一二人の拔群なる競技者を奨励しない云々と答へられた。餘程味ふべき言葉であると思はしめられた。

廿七日の午後別を告げて同校の少年部を訪れた。此の學校はモンクトン・ダウンの丘上に在つて、四方の光景形容の辭に苦しむほどに立派である。校舎といひ位置といひ高等部のそれに比して遙に勝れるを知つた。校の周圍約二十エーカーの地は此學校に屬するさうである。校長イースターヒールド氏は、劍橋大學の出身にしてブライズマンの名譽を有し、後佛國巴里のソ

ボンヌ大學に學びて優等の成績を擧げた人である。年齢六十一二歳と見受けられる快活なる老教育家である。一見舊知の人の如き親みを感じしめられた。私を遇するに異邦の客を迎ふる如き態度なく、全く異邦より歸り來れる兄弟を遇する如き趣があつた。生徒は八十名許りで全部寄宿舎に收容してゐる。イースターヒールド氏は獨身にして令妹ミス・イースターヒールド専ら主婦の役を勤めてゐる。淑徳の譽高き婦人である。兄のイースターヒールド氏より四五歳も若いかと思はる人である。

午後八時半頃イースターヒールド氏に案内せられて寄宿舎の各室を巡察したが、初めに觀たる寢室には八名の兒童等既に燈を消して就床して居た。老師の入り來るや、皆欣然として床上に半ば身を起して快活に迎へた。イースターヒールド氏は兒童等の頭を撫てつゝ、言葉を掛け後「グッド・ナイト」を告げて次の室に行き、前と同様に兒童等を慰撫しつゝ、又第三室に入つた。かくて約半時間ばかりにして豫れて私の爲めに用意せる校長室の隣にある室につれ來つた。校長の寢室は終夜扉を開放して、一年中休暇の時を除くの外閉ぢるといふないさうだ。私は其何の故なるかを尋ねたるに、兒童等をして何時でも自分の許に來つて求めるところを訴へしめん爲めであると答へた。(菱沼教授)

「生徒は百六十名内外で、悉く之を寄宿舎に收容す。」ではなうて「之を寄宿舎に收容して最も健全なる品性陶冶の教育を施してゐる」とある。少年部の方も「生徒は八十名ばかりで全部寄宿舎に收容してゐる」とある。「英國的の學校は、教室はなくても運動場がなくは、學校として存在

「ここが出来ない」いふ諺がある。英國的の學校は、人物を作る學校といふ意味であらう。教室は既にいふ通り學校中の學校、運動場は青年團の謂ひである。

兄弟と舎と團

兄弟の大切なのは、寄宿舎の大切な所以である。寄宿舎の大切なのは、即ち青年團の大切な所以である。兄弟が寄宿舎に青年團を、此の三つは同じ系統である。兄弟の延長し、寄宿舎の完備せるもの、これが青年團である。而して此の青年團は、繰り返して言へば、家庭の感情、學校の知識に對して、意志を自家の領分まで定めてゐる。

豎と圓と横

學校は主として教場であつて、教場は豎である。豎は、高い教壇に立つてゐる教師、低い席に就いてゐる生徒が、上下に接してゐるの謂ひであつて、高い所から授け、低い所のものが受ける。所謂教授であつて、教授は知識の教授である。學校は詮する所知識の住家であつて、

豎は知識である。

家庭は主としてお臺所であつて、お臺所は圓である。所謂一家團樂は、お臺所の有様を言つたもので、皆は一つの飯臺を中心に圍んで正に圓を描いてゐる。圓は圓滿であつて、やがて温情である。家庭は温み、所詮感情である。

家庭の圓、學校の豎に對して、青年團は全く横である。母の其の子を抱くや懐をふくらめて其の姿からして既に圓みを帯びてゐる。生徒の道を行くや、教師これが先登に立つて總べては縦列である。然るに、青年團は、先きに立つべきものもなければ、後に立つべきものもない。お互同志であつて所謂團栗の脊比べである。其道を行くや横列である。横列の間からは左右相顧みての相談が起る。(相談とは亦自治の謂である)。相談の熟する所實行が見はれる。横は意志である。

一人では踊れない

「膝も談合」は、横から意志が見はれるを言つたものである。相談相手がなくては淋しい。「一人で太鼓を叩いて一人では踊れない。」又「女房役」もあると同じで、女房役は膝の謂ひで

あつて、既に女房二人になれば、其の間から子こいふ力が生れて来る。

二人心を同じうすれば、金を断つほどの利き力を生じる。一人々々では容易に旅順の巔濠に飛込めないが、一個の中隊大隊に纏まれば、誰も跳つて飛び込む。一人では猫であるが、多数では虎である。好ましい例ではないが、學校騒動は教場よりは起らないで、多く寄宿舎から頭を擡げる。

孔子曰與善人居如入芝蘭之室久而不聞其香潛與之化矣。與不善人居如入鮑魚之肆久而不聞其臭亦與之化矣。是以君子謹其所與處。

三 其の價值

好 一 荷

青年團の產物は意志である。意志を理解するは青年團を理解するものであつて、青年團に對する無理解は、全く意志に對する無理解なのである。而して亦、意志の價值如何は、其のまゝ、青年團の價值如何なのである。意志にして若し知識に比ぶべくもなければ、青年團は學校の傍に寄ることも出来ない。若し意志にして知識と同様のものではあれば、提灯に釣鐘ではない、同じく是れ釣鐘であつて、雙方輕重のない好一荷なのである。

多くは意志

『陽氣所發金石亦透』の陽氣、『精神一到何事不成』の精神、天は自ら助くる人を助く』の自助、『思之思之思之而不成神助之』の思之、『點滴石を穿つ』の點滴、『大膽の中には妙智あり』

の大膽「斷じてこれを行へば鬼神もこれを避く」の斷行、皆是れ多くは意志である。曾子名は參、孔門の第一人者である。初めに孔子曰く「參や魯なり」ミ後程子嘆稱して曰く「參や魯を以て之を得たり」曾子の學は誠篤のみ」ミ誠篤亦多く意志である。辛抱、熱心、根氣、奮闘、努力、勤勉、質素、武勇、眞面目、人格、皆是れ主として意志の側である。

親 辛 抱

『親辛抱』昔からいふ。親は初代の謂であつて、初代はドコでもよく辛抱した人である。辛抱とは、早起草鞋履きで、堆肥を荷車に積んで、田を作るこゝである。此の親の辛抱によつて家は興る。二代目は『子樂』である。親は早起して荷車を挽いたが、子は朝寝して雪駄履きで、自轉車に乗つたり亦膝付きして机に凭れたりして詩を作る。併し親のお蔭で學校に入れて貰つて、物は知つてゐる。『親辛抱』は意志であるが、『子樂』は知識である。これに次ぐのが『孫乞食』であつて、所謂『うりいへミ唐様に書く三代目』である。子の代には、まだ辛抱した親も生きてゐる。楨の皮の如く荒れてゐる親の手の甲を見ては、ソナナに朝寝ばかりしてゐては濟まない氣

持も起る。孫の代に至つては、お祖父さんの辛抱は知らない。知つてゐるのは親の樂ばかりである。既に意志に遠ざかつてゐるから、たゞひ學校に入れて貰つたところで、學業の上達する筈はない。孔子は『十有五而志學』ミ曰はれてゐる。『志學』ミいつて『就學』ミか『學志』ミかいつてない。志學は立志であつて、學問も先づ意志第一である。既に意志の人でも、知識の人でもない。田も作り得ねば、詩も作り得ぬ。それでは食つて行けない。其の癖酒色は益々其の好む所である。蕩樂の果ては身を持ちくづして、到頭足腰が立たなくなつて終には躓車に乗る。人生は所詮車であつて、荷車から自轉車を経て躓車に終はる。意志に初まり知識に中ばし痴情に終はる。

大きな呉服店が、小さな目藥の古ぼけた看板を、朝夕店頭に出したり仕舞つたりしてゐる。先祖は目藥一服賣り出して、此の身代の基礎を築いて呉れたのである。先祖の辛抱を忘れては相濟まない。斯うした心懸けさへ失はなかつたなら、ドコの家にも三代目は來ない。いつまでも庭に吊してある草鞋は、まゝここに家運長久のお守札なのである。

神武天皇

これは唯一身一家に就いてばかりではない。一國にあつても亦同じである。天孫瓊杵尊が初めて高千穂峰に天下りました際、身に帯びさせられた四品は、皆是意志的のものであつた。曰く太刀、弓、矢、矢つほ。初代の天皇を神武天皇と申し奉る。神武の武是れ意志である。三韓征伐は知識を齎らして、やがて王朝時代の痴情を醸した。然るに、社會國家を宴安逸樂惰弱頹廢の間から救つたのは、矢張り所謂武門武士といふ意志であつた。

今正に三代目

大正の今日、國難を乗り切る道、國民精神の作興、唯延ては質素、勤勉に依る外はないと唱へられてゐる。明治三十七八年役頃までは『親辛抱』であつた。歐洲大戰頃からして知識が多くなつた。正に『子樂』である。これに次ぐものは勢ひ『孫乞食』でなくてはならぬ。要するに國家は今正に三代目に墮せうとしてゐるのであらう。

足は元氣

『國家の元氣』といつて、『國家の知識』とはいはない。國家は國民の元氣に依つて立つ。恰も人が足に依つて立つが如きである。頭は知識であつて足は元氣である。いくら頭が大きくて、最も緻密に立ち方を知つてゐても、足が小さくて、立つだけの元氣がなくては立たれない。何は捨て措くも、人も國も先づ立たねばならぬ。立つとは生きることである。立つの反對は臥すことである。臥すは倒れてゐるもの、死してゐるもの、併合されてゐるものである。

後足が大事

立つた上は進まねばならぬ。併し、進んでゐる間も始終立つて居らねばならぬ。前足が空を踏んでゐる間も、後足は大地を踏んで確に立つて居らねばならぬ。足の中の眞の足は後足である。前足は足の中の頭であつて、これは知識である。意志は知識に照らされるやうに後足は前足に導かれる。併し前足があつて後足がなかつたならば、唯是れ轉倒あるばかりである。さらばこいつ

て、後足があつて前足がなかつたならば、立往生であつて一向進歩がない。後足あつての前足、前足あつての後足、知識あつての意志、意志あつての知識であるが、先づ順序からいへば、立つこゝろが先に立つ。後足が大切である。

人物は後足より

都會は前足であつて、田舎は後足である。前足は浮いてゐて華やかである。後足は落ち着いてゐて地味である。此の地味の田舎の間から古來いづれの國でも人物が出てゐる。男は前足であつて女は後足である。前足は外に進んで見はれてゐる。後足は内に守つて隠れてゐる。見はれてゐるものが無くなつても、家は保たれて子供は育つて行くが、隠れてゐるものが無くなつては、大抵は後任を迎へないミヤリ切れない。同じ男の中にあつて、青年は前足であつて、老人は後足である。前足は變動であつて、後足は固定である。衆議員は前足であつて、貴族院は後足である。後足は所謂「慎重、熟練、耐久」である。同じ青年の中にあつて、都會の學生は前足であつて、田舎の青年は後足である。前足は前に出て新しい。後足は後に控へて古い。新しいのは知識であ

つて古いのは道徳である。知識には空理空論が伴ふ。前足が空を踏んでゐるに同じである。意志は實地實行である。後足が地に立つてゐるに同じである。教育勸語、術義や論語は古い後足である。ラッセル何々集や、クロボトキン何々篇は新しい前足である。

イザといふ場合

いつも前足に出たがるのは右足である。後足に控へるのは多く左足である。然るに、一朝緩急あつてイザいふ場合、「國家總動員前へ進め」の號令の下に、先づ踏み出すものは「前へ進め！左右」であつて、決して「右左」ではない。平素は多く後足に隠れてゐる左足が先づ起つ。理窟を言つてゐる前足はマサカの時の役に立たない。

眞の進歩

前足が優れてゐて後足が劣つてゐるのではない。意志の中から知識が見はれる。後足はやがて前足である。温故知新はそれである。後足の中から見はれた前足は尊い。經驗の中から得られ

た理論は大切である。経験は理論を生み、理論は経験を導く。斯うしてそこに眞の進歩がある。日本の後足に西洋の前足を備つて来たのでは、調子が取れないでいつも争議が絶へまい。争議は足踏である。

元氣の貯藏場

青年團は全く國の後足である。全國一萬幾千の青年團は、一萬幾千本の後足である。此の後足が眞に後足として確立したならば、譬へば、上波が如何に騒いでも、底波は遂に動揺しない。底波が動揺しなかつたなら、上波はやがて静まる如く、思想動揺なき、いふこも、強いて憂ふべきものではあるまい。理論は學校へお任せする。實行は青年團が引受ける。(學校へお任せするといつても、青年團の中から反つて學校の追付くことの出来ない程の珍らしい理論が出て来るかも知れない)。青年團が先づ元氣の貯藏場として自ら任じ、實行機關として自ら立つたならば、それは國家に取つて非常に大なる強みである。青年團の所能は元より他にも色々有らうが先づ斯う觀て来た時、青年團は果して軽いものであらうか。富山の賣藥如きものに過ぎないであらうか。

圓の中に十字

青年團は横である。横には知識が流れ込まない。自治青年團といふも、浮つかりしてゐる足踏するに止まる。それ故組織の教育機關を取入れて豎横十字に仕組まねばならぬ。又既に青年團は一つの體である以上、所謂命あつての物種であつて、先づ其の體を強めねばならぬ。體を強めるには内輪を繕ふもので、青年團の家庭をして圓滿ならしめることである。要するに豎横十字に仕組まれたものが圓の中に包まれてゐなくてはならぬ。これを形に見せば、青年團は全く⊕である。

學校は豎である。豎一方では眞の教育は行はれない。それ故横を取り入れねばならぬ。これ亦十字である。これまでの學校は、如何にも家庭的の情味が乏しかつたといはれてゐるのは、此の十字が同じく圓に抱かれねばならぬといふことである。されば、學校も所詮は全く⊕である。

青年團らしい青年團は、家庭らしい、同時に學校らしい青年團である。學校らしい學校は、青

年團らしい、同時に家庭らしい學校である。斯うなつて見るに、青年團と學校とドコが異ふ。家庭も亦同じで、家庭らしい家庭は、學校らしい、同時に青年團らしい家庭である。家庭も亦同じく⊕である。

家庭(〇)

|| 學校 || 知 || 父 || 床の間 || |
|| 家庭 || 情 || 母 || 臺 || 所 || 〇 || ⊕

青年團(一)

|| 家庭 || 情 || 幹部 || 一夜講習 || 〇 ||
|| 青年團 || 意 || 團員 || 申合實行 || 一 || ⊕
|| 學校 || 知 || 指導者 || 補習教育 || |

學校(一)

|| 青年團 || 意 || 生徒 || 運動場 || 一 ||
|| 學校 || 知 || 教師 || 教場 || | ⊕
|| 家庭 || 情 || 女教師 || 湯飲場 || 〇 ||

二 幹部とは何ぞや

一 其の地位

樹の幹

單に青年團に限つたことではない。何等かの組織の存する所、幹部は必ず要求される。家庭にも學校にも幹部を要する。町村にも國家にも幹部を求める。

所謂幹部とは何であるか。果して何處に位して、又誰がそれに相當するか。

幹部の幹は樹木の幹といふ文字である。樹木では幹即ち幹部に相當する。

樹木は上に枝葉があつて下に根がある。其の上と下との中間に幹がある。幹部は則ち上位でも下位でもない。中位これ幹部の立つ所である。

下士

幹部といふ語は、軍隊に於いて早くから用ひられた。軍隊では、上に將校があつて下に兵卒がある。其の上と下の中間に更に下士がある。下士即ち軍隊の幹部であつて、恰も樹木に於ける幹に相當する。

役員

今青年團では、上に指導者があつて下に團員がある。此の兩者の中間に所謂役員なるものがある。役員即ち幹部であつて、恰も軍隊に於ける下士に相當する。

職員

學校にあつては上學校長と下児童との間に職員が位する。職員は青年團に於ける役員と全く同様である。

職員室のみに就いていへば、幹部は首席教員である。首席教員は上に學校長を戴いて下に一般職員を控へてゐる。

議員

町村にあつては、町村長の下に町村民がある。而して其の中間に町村會議員がある。町村に於ける幹部は普通に此の町村會議員である。

單に町村役場内のみに就いていへば、幹部は紛れもなく助役である。

主婦

家庭に於ける幹部は、いふまでもなく母、即ち主婦である。主婦は上主人と下家族との中間に立つ。

神經

幹部の修養

四四

更に最も手近な自分一身内にも幹部がある。彼の脳髓は、一家に於ける主人、四肢五官は家族の如きもので、此の脳髓に四肢五官の中間に跨れる神経は、主婦格であつて正しく一身内の幹部である。

骨

手にしてゐる一本の扇子に就いて見るに、其の要は主人又は脳髓。其の面は家族又は四肢五官。而して其の骨は最もよく主婦又は神経に相當してゐる。骨は確に扇子の好幹部である。

中心 中堅

幹部は到る所に存する。又存せねばならぬ。大將格ではない、兵卒格でもない、全く下士格である。中に位せる故に、幹部即ち中心である。體は總べて中心に依つて結ばれてゐる故に、中心は中堅である。中心、中堅、幹部皆同物である。樹木の幹は、樹木の幹部であつて、同時に中心中堅である。樹木の中で最も用多くて最も堅い所は幹である。

幹部と指導者

一家の主人は一家の幹部ではない。政黨の首領は政黨の幹部ではない。工場の資本主は工場の幹部ではない。それは、家族が一家の幹部でない。政黨員が政黨の幹部でない。職工が工場の幹部でない。全く同じである。曾ては、青年團の幹部を集めて『指導者講習會』を開き、指導者の講習に對して『幹部講習會』を銘打つたこともある。最早今日では、指導者に幹部を取り違へる様なことはあるまい。

喜怒哀樂未發謂之中。發而中節謂之和。中也者天下之大本也。和也者天下之達道也。致中和天地位焉萬物育焉。(中庸)

二 其の使命

上意下達と下情上達

幹部の使命は何であるか。先づ樹木の幹の作用を訪ねて見るがよい。幹は樹木の幹部である。其の作用は直に、下士、役員、職員、議員、主婦、神経、骨等の使命と一致して居なければならぬ。

幹の作用は何であるか。上、葉が同化作用によつて得た養液を、其の維管束の韌皮部を通じて下の部に送る。同時に、下、根によつて吸収された養分を、同じく木質部を通じて上の方に送る。上からのものを下に送るは、所謂上意下達である。下からのものを上に送るは、所謂下情上達である。

上意下達と下情上達と、此の二者は全く幹部の使命であつて、下士の任務も、役員の仕事も、職員の職責も、議員の権能も、主婦の天分も、神経の機能も、骨の作用も皆此の二者の外には出

ない。

目から入る

今軍隊に就いて見るに、上將校は下、兵卒に向つて常に號令を下す。されど、號令は畢竟聲である。聲では戦争は不可能なので、聲を先づ具體化する下士がゐる。こゝに初めて一般者は上意の存する所を體する。斯うして戦争も成立つ。一般者にあつては、號令は耳から入らないで目から入るを常とする。

感情と勘定

今農業技術員が高い所から『麥奴豫防に就て』講話して『冷水温湯浸法を行へ』と號令を下したとする。併し麥奴は何であるか。『華氏百幾十度』といふも華氏が何であるか。所謂將校語は話からして一般に通じない。或部落で、差別語を使はれたからこいつて子供を學校からオロした。『全く感情問題からのこゝであるナ、』と出張の郡視學がいつた時、部落の父兄達は憤然として

「吾々は貧乏に暮してはゐるが、子供に筆紙を買つてやる位の錢金には困らない」此「感情」を金錢の「勘定」に取違へたのである。ソコあたりが一般者の常であつて、上も下もばかりでは、上意は容易に下達しない。

不言の號令

麥奴こは黒穂のここ。華氏百幾十度は凡そこれ位の熱さである。己れ先づ試みて見ようといふ一人がゐる、さて其の一人が、實際一本の黒穂も見えない麥畑を作り出したなら、其の麥畑はソコを通る人々に對して、終日不言の號令を下すのである。此の不言の號令が最も大切なので、此の不言の號令を目の前に見て、一般者は初めて納得してこれに倣はうとするものである。

聲から聲へ

「民力涵養」「消費節約」は近頃に於ける大號令であつた。然るに是等の大號令が果して如何程下一般者間に徹して、眞に陣地の占領の見るべきものがあつたであらうか。

地方長官會議の席上、大臣からして一に聲高く「民力涵養」を號令を下される。それ承つた地方長官は、今度は直に下座に向き變つて郡市長會議の席上、一に聲高く「民力涵養」を號令を取次ぐ。次に承つた郡市長は、同じく向き變つて町村長會議の席上、教はつた通りの號令をかける。將校級仲間、聲から聲へ傳へてゐてそれでよいであらうが、さていよいよ實戰なつて眞に號令の下に實動すべき一般兵卒級たるもの、手前迄來て見るに、今度は町村長が向き變つていくら號令をかけた所で、號令だけでは却々容易に動かない。聲から聲へ傳へる間は「來る何日何々會召集」を日を期して滞りなう進んで行くけれど、イザ行に移さうといふ段になると、折角の大號令も忽ちハタこ行き詰まる。

元來一般者は、聲では容易に動かない所に重みもあれば、強みもある。若しフイノミ聲だけで飛んでゐたなら、それこそ反つて頼りない又危い。

訓令の塵捨場

目にこそ見えね、村境には號令、訓令、告諭、指示といふ類のものが、實際堆く積み重ねられ

て、全く號令の塵捨場が出来てゐるのであらう。使を立てるけれぎ、一向先方に届かない。又出す、又出す。勢ひ號令、訓令の濫發をならざるを得ない。ソコで號令、訓令といふものが段々權威を失つて来る。而して斯くの如きは、主として上意下達の幹部が缺けてゐるからのことである。

下飾観

更に見れば、將校は多く營外に宿泊する。而して定めの間だけ多く馬に乗つて来る。馬が近寄れば人が逃げる如く、高い馬の上からは、低い人に接することは難い。

『上用目下飾観、上用耳下飾聲、上用慮下繁辭』とある。上は知識である。知識は明察である。明察の前には下たるもの行を飾る。現に兵卒は將校の前ではいつも氣を附けの姿勢を取る。氣を附けの姿勢は、行の飾である。飾は見えても、それは表ばかりであつて、裏は却々見え兼ねる。

將校の轉任を遅れ走せに停車場に見送つて來た一人の兵卒、息急きながらも直立不動の姿勢で、

舉手注目も鮮に『時恰も暑氣に向ふ折柄幸に國家の爲め——』と云々。所が、時は秋の終りで漸く寒さに向はうとしてゐたのであつた。これはしまつたばかり「元へ、時恰も寒氣に——」とやり直した。なるほ此の『元へ』式では下情が上達し難い。

砂上の囁語

下士は兵卒と異つて、將校に對しても左程の遠慮を感じない。生徒は減多に校長室には近寄らないが、職員は常に校長室に出入りするに同じである。されば、下士にして知る所があれば、下士に依りて將校も亦知る所がある。

郡青年團の總會が碩の芝生の上に開かれた。既に式が済んで體育大會に移つて、團員は三々伍々ソココ、に横はり蹲まりしてゐた。偶々團長たる郡長が下りて來てソコを通りかゝるに、横はつて口喧しう何か言ひ争つてゐたものが、ハタミ口を噤んで膝を立て直して畏まつた。砂上の囁語は容易に將校格の團長の耳へは入らぬ。ソコへ今度は役員が遣つて來た。團員は格別起き上らうこもしない。役員も亦腰を下すが早いか團員と共に胡座をかく、團員は前の話を續けて、今

年の徒競走の組合せは不公平極まるなご、いふ。幹部の耳へは下情が入り易い。既に幹部の耳に入れば、やがて指導者の耳へ入る。

お米を下さい

更に學校に就いて見るに、下士が管内に宿泊してゐるに同様に、職員は教室内で生徒間に浸つてゐる。『皆さんは、やれ火事じやこれは叶はないこいふ時は、先づ一番に何物を持ち出しますか』尋常一年生は直に手を舉げて『先生々々茶碗とお箸を出します』他の一人は『先生々々、佛さんを出します』一人の子供が手を舉げて『先生お米を下さい』これは町場の學校であつた。見れば硯の水が盡きてゐる。『水を下さい』こいふべかりしを、ツイ浮つかりして『お米を』こいつた。愛らしいこゝ限りない。斯うして子供の家庭の様子は、生徒間に浸つてゐるものにあつては、割合に判断がつき易い。

式辭不徹底

何々式の日、校長は全校の生徒を講堂に集めて式辭を述べた。中には一年生もゐれば六年生も又高等三年生もゐる。一年生の耳に入るやうな式辭は高等三年生の耳には入らぬ。高等三年生に相應しい程の式辭は尋常一年生には分らない。式辭が不徹底を免れないのは已むを得ないことである。それを受持先生が各自教室に持ち別れて、夫々布演を加へて具體化しやうと勉める。其の受持先生の布演を教室内に於ける幹部が先づ引き受ける。學校全體からいへば校長が指導者であつて、受持先生が幹部である。一教室に就いていへば、受持先生が指導者であつて、級長副級長が幹部である。此の級長副級長が、受持先生の布演を先づ具體化するこゝによつて、上校長の式辭が初めて下達する。

數が少い

受持先生が生徒間に浸つてゐるに同様に、一家の母親は子供達の間に浸つてゐる。今主人が早起を命じたとする。主人は寢てゐて他を起してゐるのではない。自分も同時に早起してゐるのであるが、主人は別間にゐるので、子供達の目にはそれが見えない。然るに、母親の早起は、抱か

れてゐる子供達の目に直に見える。従つて子供達も早起する。

演習を見てゐるに『進めッ』と號令を下して置いて、將校自身はトント後方に飛び退く。口ばかりであるといふのではない。たゞひ號令諸共進んだ所で、將校は数が少い。多数の兵卒には目に當らない。例へば、一府縣下一二個所の模範農場を設けた所で、其の成績は廣く一般者の目に觸れ難いと同じである。幹部に至つては、其の数が將校よりかも多いだけ、一般者にも接し易い。幹部に上意下達とは、亦斯うした關係もある。

母親と子供

兵卒は將校を憚り、生徒は校長に遠慮するに同様に、子供は父親とは兎角隔たつて、動もすれば自分なるものを包み隠さうとする。父親は子供に欺かれることがある。下士は軍隊の母である。稱せられて、兵卒はこれに對して多く氣兼ねせないに同様に、子供は母親に對しては何等の遠慮を持たない。寫眞機が入る、萬年筆を買つて呉れよよくいふ。子供の氣分氣持は、母親には全く分る。家庭の下情に通ずるものは、母親に限る。

反射中心

最も鮮明に幹部の使命を見はしてゐるものに、身體内に於ける神経がある。神経には前根と後根とがある。前根は遠心性のもので、上脳髓から下局部に命令を傳達する。運動神経なるものことである。後根は求心性のもので、局部から上脳髓に刺衝を傳達する。所謂知覚神経なるものことである。運動神経は上意下達を司つて、知覚神経は下情上達に當る。

神経が理想の幹部であるかに思はれるのは、後根中に反射中心又は自衛中心を有してゐる點にある。神経は外部からの刺衝の一から十までを悉く上に取り次ぐのではない。晝寢をしてゐるに、誰か悪戯をして鼻の孔に紙紮をさし込んだ。スルト忽ちクシヤミしてこれを斥けやうとする。しかも本人は目を覺まさない。全く神経限りで扱つたのである。所謂反射運動がこれである。賢い幹部は、一々指導者の指揮を待たないで、大概の事は自分の手で處置して行く。

骨の立場

今一つ最も雄辯に幹部の使命を物語るものに扇子の骨がある。扇子を開くに當り、先づ動くものは骨である。要は其の名の示す通り、肝腎かなめの要所であるに違ひはないが、少しも動かさしないで、號令を下したま、後は唯眺めてゐるこいふ趣である。骨が動かなければ面は決して動かない。骨が動けば面は從つて動く。骨は眞によく上意を下達する。

骨は面の中に挟まれてゐる。恰も下士が兵卒と起居を共にしてゐるに同様である。管内にはいはるべき扇面内の出来事に就いては、先づこれを知るものは骨でなくてはならぬ。紙が破れた、誰か鬨を一株晝いた。何事じや勿體なくも扇子を尻に敷いて座はるこは、こいつたやうに、一々下情に通じるこは、常に面から遠ざかつてゐる要には望まれないこである。

體を成す

✓ 樹木は幹あるによつて初めて體をなす。幹部がよく上意を下達し、下情を上達するこによつて、一家にあつては一家の圓滿を保ち、青年團にあつては青年團を生かすのである。區別していへば、上意下達と下情上達との二つであるが、纏めていへば、體を成す。これが幹部の使命である。

る。

上 中 下

今上中下の三字に就いて見るに、上は終りの一劃によつて下に對して自ら區別しようとしてゐる。一劃は例へば他に對して溝を作つてゐる形である。又下は、初め一劃によつて既に上に對して自ら區分しようとしてゐる。一劃は例へば他に對して牆を高くしてゐる象である。斯うして上と下とは動もすれば初めから離れ勝つものである。然るに中は、上と下に就いて見るやうに、上下のいづれに對しても、他と隔たらうこは決してしてゐない。其の中の中の一本の棒は、上下に通じて上にも接すれば又下にも近づかうこしてゐる。中よく中たるに於いては、其の中たるこによつて、上と下とが一本に纏なされる。其の狀は上中下である。上は中によつて下に下り、下は中によつて上に上る。斯うなつて初めて上下一味なる。

反抗文明

西洋の國々は、大體に於いて其の初め横から成つてゐる。横とは上下二階級を指すもので、二階級とは征服者、被征服者の謂ひである。征服者即ち貴族、被征服者即ち奴隸であつて、此の二者からして國は先づ出發してゐる。其の出發は、例へば刑務所門内から鐵鎖に維ぎ維がれて、追ひ立てられて出て来る囚人、押丁を見らるやうである。下の方が逃げようすれば上の方は逃がしましめる。上の方が叛かしめまされれば下の方が叛かうとする。上は上同志横に組み、下は下同志横に組む。斯うして相對抗する間に出來上つたのが恐らく西洋文明の特色であらう。さればデモクラシーなき、いふものが、如何にも反抗を意味してゐるこゝは元より無理からぬこゝなのである。

自桓武天皇

豎の國はさうでない。豎とは姑く上中下三階級をいふ。上は皇室であつて、此の皇室からして、平氏出、自桓武天皇。源氏出、自清和天皇。こゝあるやうに、一皇室といふ源泉からして、色々下つて人民となつて、終に幾千萬條に分流して、こゝに百姓即ち臣子がある。これが豎の國である。

されば『我れも亦天兒、屋根の末なればその中ごろは兎にも角にも』こゝあるは、少しも冗談ではなうて、其の源に遡れば、終に豎一本に納まつてしまふ。天津神の外に國津神もあつた。何族の外に何々族もあつた。民族は單一であつたといへまい。皇別、神別、蕃別なき、分けもする。併し、小路は大道に合して一つになつた。細流は終に長流に注いで同じ流れになつた。既に豎一本である。其の狀恰も彼の『塵拂ひ』如きものである。末は幾つかの房に分れてゐるも、其の根本に至つては一つに纏められてゐる。歴史を繕いて見るまでもない。末のものが根本に對して及向ふなきは豎の國では大それたこゝである。保元、平治の亂といひ、南北朝の争ひといふも、唯左右に一房づゝの源平藤橘が小競り合ふたこゝに過ぎない。

相合して國本

横二本は勢ひ上下に離れて隔たりを生じる。其の隔たりの生じてゐる所が中の位すべき所であつて、隔たりの生じるは、上と下とのみで中がないといふこゝである。然るに豎一本は、何處までが上であつて、何處からが下であるか區別はつかぬ。總てが上であるこゝもいへれば、又總てが

下であるともいへる。所謂上下一體である。上あつての下、下あつての上であるから、下の者は上を思ひ、上の者は下を思ふ。豎の國では、君本民本相合して國本をなす。

例へば一本の尺を立てたやうである。假りに尺の五寸以上の所を上にして、五寸以下の所を下にしたならば、五寸五寸相接してゐる所は尺の中である。既に豎一本であれば必ず中がある。されば豎の我が國では家族制度なるものがある。家族制度は全く中の見はれである。

家族制度は幹部制度

家族制度とは、上親が子を思ひ、下子が親を思ふ。其の親心と子心との結合を中心として出来てゐるものである。親は子の爲に一つの蜜柑も自分は食べないで、子に下達しようとし、子は亦ヤツト獨り立しては、ニコ／＼して親を呼んでそれを上達する。「晩酒や何はなくても子の寢顔」親は俯して子を覗き、「元日や何はなくても親二人」子は仰いで親を見る。此の俯する所は樹木の幹の鞞皮部に相當し、其の仰ぐ所は同じく木質部に相當する。斯うして家は幹であつて、家族制度は幹部制度である。而して此の幹たる家は、豎の國の中位にあつて、其の中堅を保つもので、

其の國の精華は家族制度に存し、其の根本は家族制度に淵源する。

横とは夫婦

横の國では、家も亦横から出来てゐる。横とは夫婦の謂である。夫婦は二人である。二人横に肩を並べて歩く。所謂男女同權である。僅に愛によつて調和される。豎の國では、家も亦豎である。豎とは親子のこころである。親子は三人である。父親が豎に子供を肩車に載せて、母親が後から大きな風呂敷包を抱へて行く。風呂敷の中には子供の着替がある。横列ではなうて縦列である。こゝには夫婦の権力關係はない。親の慈悲があるばかりである。愛は主として横の國のものである。慈悲は多く豎の國のものである。二人の者は子供を別室に寝かして、二人で相抱いて寝る。甚だ密であるけれど、愛が薄らけば次第に遠ざかる。三人の者は子を中心に置いて川の字なりに寝る。「性欲上の關係は短し、されど子孫愛護は長し」で、川の字なりは容易に解體せぬ。子は夫婦のカスガヒミいふ。カスガヒミは、一に親の慈悲を物語るものである。

無階級

横の家は其の家一代限りで滅するが、豎の家は先祖代々子々孫々永く續く。横の國には革命が起り易いが、豎の家はいつまでも平和である。いつまでも平和であり、又永く續く所以のものは、中が備はつて上中下三階級から成り立つてゐるからで、姑く之を三階級と稱するも、其の實は一階級であつて、詰まりは無階級なのである。

肝煎

上下一味になつて體完く成る。幹部が其の使命を果たすことによつて、初めて上下は一味になる。されば軍隊では、下士を稱して軍隊の支柱といつてゐる。各種團體の役員をば、世俗にこれを肝煎といふ。幹部は眞に肝なのである。

女房の襷

『女房の襷は家のしめくゝり』とある。さる所に縁談が持ち上つた時、生憎女の方が片目であつた。併し男は和歌つて曰ふ『みめよきは夫の爲にふためなり、女房は家のかためなりけり』と。家は實に女房によつて固められる。

骨の無い扇子

扇子の幹部を骨と名づけたのは、最もよく考へたものである。扇面が一杯に破れてゐても、要があつて骨が揃つてゐたなら、拾ひ上げて紙を貼れば又何かに使へる。扇面に何の損じもないが、要が亡せてバラバラになつてゐるものは、要の代りに紙糊でも通せば、又いくらかでも役立つ。然るにこゝに骨の無い扇子があるとする。骨の無い扇子は想像するにも骨が折れる。骨の無いのは扇子が無いのである。要は其のまゝで又扇面に少しも損じはないにしても、骨が無い、又骨が折れてゐるでは使用に堪へないのである。

腹を切る

人の身體を物理的に見れば、重力の中心は所謂臍下丹田に稱せられる邊にある。臍下丹田は、彼の腹に稱せられるもので、腹が据つてゐる、腹が強い、なき、言はれてゐるものこれである。此の腹は、亦一種身體の幹部に相當するもので、全く身體の中堅に位してゐる。武士が昔から腹を切るこいふは、一舉にして此の中堅を衝かうとするものであつて、中堅が潰れば全軍が潰える。腹が壊れるこ全體が壊れる。

下士集會所

町村に於ける幹部は、普通に町村會議員これに當る。町村會議員が、唯年幾回會議の席で單に事を議し合ふばかりでなく、當局に町村民との間に介在して、町村會は一つの下士集會所として、こゝに相集まつて相談し、散じては各自に常に其の町村に於ける先輩を以て自ら立つたならば、町村の治績はこゝに初めて擧がるに違ひない。

篤志者

獨り町村會議員の人々には限らない。彼の一般に篤志者に稱せられるものは、全く町村に於ける眞の幹部である。いづれの優良町村に就いて見ても、ソコには屹度一二の篤志者を見る。普通に篤志者なるものは、強ち定まつた肩書を持つてゐるこいふでなく、それが自分の當然の職務であるこいふでないにも拘らず、自ら樂み自ら進んで、始終町村の爲に盡力し、よく人々の世話をする。

元來治める者は治められる者である。治められる者は治める者である。これが町村自治體なるもの、本領である。然るに、治める者は動々もすれば治められる一方を忘れ、又治められる者は同様に治める一方を忘れて全く吏となり、治められる者が治める一方を忘れて全く民となる。斯うして吏と民と、治者と被治者と此の二つが分れては、自治の發達は覺束ない。然るに、篤志者なるものは、吏民一體を自ら其の身に示現するものであつて、篤志者なるものが其の間にゐるこによつて、よく吏と民とが一本に維がれるのである。

版頭

明治維新以前の地方行政に就いて見るに、村には莊屋があつて、其の下に組頭、版頭があつた。版頭は五人組の頭であつて、一名を伍長といつて全く村に於ける幹部であつた。町にあつても亦同様、町奉行の下に町惣代があつた。曾て六大都市事務協議會が開かれた際、「昔の町惣代の類を公然市制上の機關とする件」が附議された。全く江戸時代の制度復活で、各區に若干名づゝの惣代を置いて、區役所と一般市民との中間に立たせようといふのである。

明治二十一年市制及町村制公布の砌「隣保團結の舊慣を存重して益之を擴張し」に上諭された。隣保團結の舊慣は、永く地方の自治制の基幹をなすべきものであつて、恐らく主として五人組制度の間に養はれたものに違ひない。而して五人組が此の美しい習慣を養ひ得た所以のものは、亦恐らく其の伍長なるものが、唯傳達、交渉の事のみ止まらないで、常に衆に先んじて自ら行ひ自ら治めて、よく五人組の中心となつてゐたからに外ならぬのであらう。

地 天 泰

明治二十三年時の侍講元田東野翁は、其の御講書初に於いて、周易「地天泰」の卦に就て進講

された『元田先生進講録』に曰く「此の卦に地天といひ、地を天の上に置くは通常天地に順に云ふに比せば逆にして凶なるべきに、それを泰といふは疑ふべき道理なるに、茲に大なる意義ありて、易理の無限なるを味ふべきものなり、從來天地の上下位を正うして、萬物其の間に生々して、各其の所を得て窮りなきは、蓋し天の氣は常に下り、地の氣は常に上に昇りて、天地の氣相交りて和合する故に因て然るなり、若し之に反して、天の氣は下に降らず、地の氣は上に昇らず、天地隔絶する時は萬物發育せず、是れ天地となれば否塞の兆を顯はし、地天となれば泰和の結果を得る所以にして易理の無限なる味ひなり。君臣上下相會するの道理、此の道理を一徹にして、君上は兆民の上に位し、九重の邊にまします。雖も其の御心は常に率土の濱、無生の窮民、破屋漏穰の中に至る迄通はせられ、臣民の情は、常に丹陛の下に達して、面のあたり德音を拜するが如く、上下の間情實貫通して、毫も壅蔽なき時は天下泰平、乃ち地天泰の卦なるなり。今年以後を御國會を御開きありて、天下輿論公議を集めて其の中を執り、民情の適する所を以て契矩の道更に施行なることなれば、上の御心は益々下に降り、下の情は彌々上に通じて國家泰平を歌頌し、地天泰の卦之を現在に見るは、今年の今日より豫め卜知する所なり」云々。國會は由來

國の幹部であつて、其のよく天氣を下達し地氣を上達する所に、初めて天下泰平國家安全、五穀成就を見る。

資本主の代官

中位にある者が、其の中を守らないで、上に偏し又下に黨したならば、上下閉塞して互に離反する。多くの争議は、恐らく中位者が乏しいか、又は中位者に其の人を得ないからのこころであらう。

私は今回の視察に於て、機會ある毎に色々の方面で月給取階級の人々に問題を提供して、所謂中等階級としての、乃至は役員階級としての地位——特にそれが一方に於ては資本主階級に對して、他方に於ては労働者階級に對して自己の有てる地位に就いて、如何に考へつゝあるか、労働問題に對する自己階級の關係を如何に解釋し、事に向つて如何に動かんとしつゝあるか

を突き止めやうと色々と試みてみた。けれども其の努力は悉く失敗に終らざるを得なかつたことを、私は如何にも残念に思ふ者である。或人は周圍に氣兼ねて思ふ事の半分も得云はなかつたり、或人はペラペラ喋りは喋るが、頓と無自覺で無定見で無方針で無計畫なるを表白するに過ぎなかつた。

現今大多數の役員階級——特に企業界に於け

る役員階級の人々は、たゞこれ資本主の代官たるに過ぎぬやうである。而して代官たるを以て榮譽とし、資本家の意思を付度して其の利益の爲に働き、其の機嫌氣稜を取るを以て即ち自己の立身出世の道と心得て居る。現時の企業組織の下に於ては、労働者が永久に労働者たるが如く、大多數の役員も永久に役員階級に居るの外なく、一世——或は子々孫々——宿命的に役員

階級の人として月給に衣食するの外なく、精神的にせよ兎も角勤勞を賣つて衣食するの外はなくて、労働者階級とこそ多く利害を共にすれ、資本主階級と利害共通なる點は甚だ少きことに就て、十分の理解を有する者としては少い。従つて自己の階級立場を明にし且立場を衒り、主張すべき利益は之を主張するに躊躇するなき覺悟を有する者としては少い。(河田博士談)

✓所謂月給取階級は、其の會社工場に於ける幹部である。其の幹部が中たる自己の位を守らないで、全く資本主の代官たるに至つては、中抜きの上資本主と下労働者との二階級のみなる。さらばさて、全く労働者の群に投じてしまつては、これも亦同じく二階級になつて、動々もすれば所謂民衆の煽動者として、上下對抗の勢を馴致する。

どう描く積り

ある書き物に『興味ある二』と題して、次のやうなことが書いてあつた。

私は今一枚の漫畫を見詰めて居る。其れは『一』『二』『三』の三つの局面が描かれてある。

『一』は大理石の宏壯な建物、其の國の富の大部分を支配する大会社が描かれてある。其の白宮殿の五層樓上には立派な服装した其處の重役らしい脂きつた肥大漢が窓から半身を外へ出して、巨きな手を出來るだけ長く差出して『協調しやう』と叫んで居る。

其の貌には複雑な表情がある。すると遙か下界に青服のガツシリした男が、その肥大漢を見上げて之れも巨きな面も節くれ

立つた手を出來るだけ差し出して『協調しやう』と叫んで居る。

其の貌にも複雑な表情がある。而して二人の手と手とは甚しい距離がある。『三』の場面は街上の五層樓上が室の外の内か一切解らない。唯、紙の程よい處に一本の水平線が引いてある。其の線の上に『一』の二人が固く固く握手して居る。

『二』は未だ白帯の儘で何物も描いてない。唯右上の隅に『二』と書いてあるだけである。一體此の畫家は『二』をどう書く積りなのだらう。『一』として其は何時なんだらう。

『一體此の畫家は『二』をどう書く積りだらう。』下から手を出してゐる青服のガツシリした男も相並んで、更に今一人の男を描くべきではあるまいか。そして此の一人の男は、同じ地を踏んでゐるながらも、青服の男よりも頭だけ抜いて脊が高い。其の片手は上の脂きつた肥大漢を握手し、他の片手は下の青服の男を握手してゐる。即ち其の中間に立つて、上下の氣脈を通じてゐる

模様を描くべきではあるまいか。而して其の傍に、文字で以つて『幹部確立』を註する。

上下を牽制

幹部が確立すれば、亦上に在るものをして驕らしめない。幹部にして下の群に投じたならば、米騒動もアレだけでは濟まなかつたであらう。幹部が確立すれば下に在るものをして叛かしめない。幹部にして上の群に投じたならば、下のものは唯噪ぐのみで一向歩調が揃ふまい。斯うして幹部は亦自ら上と下とを牽制して、自分の手許に維ぎ留めて上下一本に纏める。

文化線

一本の扇子を開いてこれを倒にすれば、白扇倒懸東海天さある如く、丁度山形になる。此の山形はよく世相を見はしたもので、世の中はいつの時代でも多く山形である。山形の嶺は有産階級、裾は無産階級、其の中腹は中産階級を見はしてゐる。有産階級は嶺の狭い如く少い。無産階級は面の廣い如く多い。中産階級は嶺の如く狭くない、裾の如く廣くない如く、無産階級はご多

くない、有産階級はさ少くない。

山形の中腹に當る所に骨がある。骨は扇子の幹部である如く、中産階級は即ち社會の幹部である。中産階級にして確立すれば、社會は常に穩かである。上の一線は貧乏線であつて、下の一線は貧乏線である。更に中間の一線は所謂文化線である。貧乏線を文化線にまで引き上げ、貧乏線を都合よく文化線にまで引き下げる所に、今日の所謂社會政策がある。文化線は中産階級を見はすものであつて、社會政策を稱せられるものも、畢竟は中産階級の確立を前提としたものである。中産階級が確立すれば、社會が確立する。

世界の幹部

幹部は平和を司る。世界に幹部が確立すれば、滅多に戦争は起らない。人種會議や國際聯盟は、世界の一種の幹部である。

字書を繙いて

字書を繙いて見るに、幹はよくす(能率)である。はたらき(伎倆)である。からだ(體)もこ(本據)主要(せほね)わきばら(脊)である。又つよし(強)である。又幹止。幹才。幹事。幹翻。幹練。幹盡である。幹止は、事とする所に安んじ居る所に安んずる義、書經に「爾乃尙有爾土。爾乃尙寧。幹止」がある。幹才は、働き。幹事は、事を能くする義、易經に「貞固足以幹事」がある。幹翻は、主なるおほほね、唐書に「雖幹翻非強亦可免累」がある。幹練は物事に熟練する義、「幹練機事。綱繆樞機」。幹盡は、幹は善、盡は事、事を善くするをいふ、易經に「初六幹父之蠱。有子考无咎」なご、ある。

天先成、而地後定、然後神於生。其中一焉、號曰國常立尊。一書曰、高天原所生神名曰天御中主尊。謹按、天者氣也、故輕揚、地者形也、故重凝、人者二氣之精神也、故位。其中、凡天地人之生、元無先後、形氣神不可獨立也、天地人之成、未嘗無先後、氣倡之、形和之、神制之、蓋草昧屯蒙之間、聖神立。其中、悠久而不變、是所以尊。其神、號曰國常天中。也、夫天道無息而高明也、地道久遠而厚博也、人道恒久而無疆也、天得。其中、而日月明、地其得。其中、而萬物載、人得。其中、而天地位、恒中之義、萬代之神聖所。以正。其神。也。(中朝事實)

三 其の修養

意志實行の範圍内

幹部の使命は上意を下達するにある。上意は要するに訓令、告諭の類、説教、講話如きものであつて、先づ紙上の文字、壇上の聲である。而して下達は、此の文字と聲とを一步衆に先んじて身に現し行に示すの謂である。要するに知識理論の事ではない。

幹部の使命は亦下情を上達するにある。既に上達しようと思すれば、先づ下情に通じなくてはならぬ。

道端に住つてゐた一人の農業技手が、近うに向ふの小高い丘に宿替した。人が通りがけにも立ち寄らないで頗る閑であるといふ、閑ではあるが村の様子が頼み知れなくなつた。講習會の講師が、時間間に會場の女關に車で横着けて、時間限りに又迎への車で宿の女關に横着けてゐる時は、樂ではあるが講習員の下情に觸れることは望まれない。

横着けは即ち横着である。横着では下情に通じられない。下情に通じること、亦同じく知識、理論の事ではない。主として意志、實行の範圍内である。

鐵 砲 蟲

幹部の資格は先づ意志である。意志は元來堅いものである。樹木の幹は最も堅い。根は辛蟲如き根蟲が犯し、葉は蟻のやうな蚜蟲が喰ふ。幹に至つては僅に鐵砲蟲の齒に合ふのみである。鐵砲蟲でなくては齒に合はない程堅いのが、幹部の資格の存する所である。

知識の作用

併し唯單に意志ばかりではない。上意を下達しようと思すれば、先づ上意の何たるかを知らねばならぬ『感情問題』を『勘定問題』と聞き違へて、幹部に更に通譯が入るやうでは、其の役目は満足に果たされない。自ら新聞雑誌の論説を書くことは望まれないまでも、論説を読み下すだけの知識がなくては、世の中に立つて幹部たる地歩を占めることは六ヶ敷い。

上意を知ることは、單に感情を勘定し聞き違へないばかりのこころではない。寧ろ、上意を如何に噛み砕いて如何様に具體化するべきかを案出することである。これは知識の作用に待つ。

幹部は上意を下達するも、其の悉くを下達するには及ぶまい。宜しく下情に照合して、其の下達すべきや否やを先づ取捨判断せねばならぬ。老練なる下士格の者は、必ずしも一々若い將校格の者の命令には服さない。而して此の取捨判断は、亦知識の作用に待つ。

下情を上達せねばならぬ。併し、犬吠ゆ、猫鳴くの類までも一々隊長に報告する必要はあるまい。此の事柄は上達すべきや否やを願み『一葉落ちて天下の秋を知る』。一本の葉も風の方向を示す』其の一葉、一本に自ら着眼する如きは、是れ亦知識の作用に待つ。

上知と下意

上意下達と下情上達、此の下の字の附く下達と下情とは意志の領分であつて、上の字を冠る上意と上達とは知識の域内である。

關二四門一

幹部は意志と知識を要求されるばかりでない。否、寧ろ其の前に感情の人でなくてはならぬ。幹は、下、根と接してゐる。爾かも上枝葉と離れない。上、枝葉と接してゐる。爾かも下、根と離れない。下に對しても軒を並べてゐる。上に對しても屋敷續きである。書經舜典に『關二四門一、明二四目一、達二四聰』とある。四門を闢けば天下一家である。幹部は天下一家の如く門構へなしで、上下左右から出入されねばならぬ。母は一家の幹部である。母は上の者にも抱かれ、下の者にも袂に取り纏がられる。抱かれたり、抱いたりするのは母に限る。其の母は愛の本、温の泉である。

煎豆を掴んで

欄干の鬼寶珠は、通りが、りにもよく撫でられる。圓いからである。圓いものには親み易い、煎豆を掴んで食べてゐるのを見るに、誰れも先づふくらみを持つてゐる圓い分から手にする。餅

は少しは小さくても、餓頭のやうにふくらんで圓いのが甘さうに見える。圓いこは圓滿の謂ひである。圓いのは厚い。厚いものは温い。而して斯くの如きは多く感情の部に屬する。

據つて立つ所

一家の幹部は唯温いばかりではない。鬼寶珠は圓いばかりでなうて、頭に尖りを持てる。『女は弱くされど母は強し』とある。弱いのは感情であるが、強いのは意志である。後足は全體を支へて立つ。辛抱強いのは後足の特徴であつて、實際女は男に比べて根氣強い、よく死の脅威にも持ち堪へて、長壽者が男よりも多い。山陰の城崎では、天明元年以降百四十幾回に養老會が繼續してゐる。最近の調べで、會員百四名の内、男三十名、女七十四名である。全國九十歳以上の高齢者は、男四分女六分の割合であつた。『男の念力』といふよりも『女の念力』といつた方がウツリがよい。死んでから幽霊にまで出るのは多く女である。意志であり、知識であり、感情である。併し幹部の先づ據つて立つ所は情意である。

鯉の漚登り

意志の最も強いものを手近な流れ川の中に得た。それは鯉である。諺に『鯉の一撥ね』といふ。鯉は捕はれて水端を離れようとする際、唯一度、渾身の力を揮つて精一杯撥ねる。既に脱れ得なかつたならば、最早觀念の眼を瞞つて、組上に肉を殺がる、も尙ほ自若こしてゐる。一たび肉を殺いでお指身を作つて、再び元の様に骨の上に並べて置く。鯉の姿造りこはこれである。將に客に進めやうとして、猪口の醬油を一掬其の眼玉に注ぐと、背ばかりの鯉は尾の尖をピリ／＼と動かす。古來いづれの地方でも、男の子が生れると、生氣の漲れる五月に鯉轍を樹て、祝ふ。鯉の元氣、根氣、意志にあやかれといふのである。

鯉は如何にして此の意志を得たであらうか。『鯉の漚登り』とよくいふ。漚登りとは流れに遡るこいふことである。鯉は常に好んで流れに遡る。所謂逆流である。此の逆流である所に鯉はよく其の意志を養つたものである。

幹部候補生

誰もが煙草を喫む。自分も飲む。誰もが酒を飲む。自分も飲む。此れは流れに順ふもので何等骨は折れない。誰もが酒を飲んでも自分一人は決して飲まない。それは逆流である。幹部候補生は、いづれかの點に於て其の初め衆多毛色を異にする所がなくてはならぬ。一般者流から姑く除外される程でなくては、候補者としての資格は乏しい。早く周囲からちやほやと囃されるやうでは、將來幹部として立つ見込は先づ少からう。初めの程は役員選挙に一票もない位が、寧ろ望ましいのであらう。

意志と芽立

意志は亦樹木の芽立に相當する。芽立は名の如く立つてゐる。立つは意志である。意志は普通に通に立つ形によつて見られる。意志によつて立ち、立つことによつて意志を養ふ。立つことの反対は横はることである。總じて晝は立ち夜は横はる。晝は意志の生活であつて、夜は所謂睡生夢死である。此の睡生夢死からして、意志生活に入る限界を朝起といふ。横から豎に立ち上ることにあつて、最も手際よく立ち上るを早起と稱す。早起は意志であつて、同時に其の意志を養ふ上に最も大切な働きを有するものである。

元氣のない樹木は芽立たぬ。意志のない人は朝寝をしたがる。寢床の中は心地がよい。これに打ち克つて立ち上る所に意志は養はれる。早起は意志を抱いて起き、朝寝は寢床に置き忘れる。

小早起

日常眼前の小克己、小實行、小意志を忽にしてはならぬ。假りに早起には相當大きな意志を要するにしても、菓子器に盛られてゐる饅頭を、モ一つ抓まうとして、マア、ミ我慢して中止するには左程の意志を要しない。小克己に意を注ぐことによつて、早起するだけの意志もやがて養はれる。饅頭から手を引くは、小早起である。

出て立つ

既に早起して食事を済ませば、やがて家の敷居を跨げて外に出で立つ。此の立つは外に伸びるものであつて、人間の芽立である。人間の芽立を普通に「働く」と稱ふ。働くは意志から出て亦意志に歸るので、働くことによつて益々意志を強める。一口にいへば「早起して働くこと」これが普通に意志涵養の道である。

實行の足跡

意志實行が、如何程尊いものであるかを先づ納得することは、これを強め養はうとする努力を喚び起す上に於いて大切なことである。一代の善知識の聲が、終日終夜の説教で嘎れ果て、も、御同行衆の一人の杖が御堂の階段脇に轉がつてゐるのは、それだけでは決して起き直らない。ソコを通りかゝつたものが、誰でもソト屈んで一寸これを取り上げれば、二三秒時間でその杖は直に元の通りに直る。米が穫れたも、トンネルが通じたも、物質が瞬間に罹災地に集まつたのも、所詮は皆意志實行の足跡に過ぎない。

臨終刹那の夕

物品を賣買しては、通俗に、損したミか得したミかよくいふ。併し、一方に損したものがあれば一方に得したものがあつた。得したものはかりでもないが、損したものはかりでもない。然るに、田草採りを一度だけ横着した爲に、米の收穫が一升二升でも少かつたミすれば、それは損したもののばかりで誰も得したものはない。一蹴打ち込む所を二蹴打ち込んだ爲に、一つ實の筍の茄子が二つ實のつたならば、これは得したもののばかりで誰も損したものはない。眞の損ミか得ミかは、斯うして働くミ否ミの謂ひに外はあるまい。

働かれる身を以て働かないのは、空しく働きを持ち腐らすもので、これ程眞の損はない。地中に埋もれてゐる金銀は、亦掘り出すミも出来る。働かないで日々埋もれて行く「働き」は、夕陽を呼び戻すミの叶はない限り、最早如何にしても取り返しはつかぬ。

働きさえすれば必ず何か目に見える。いつか何處かで、誰かが得をする。品物が手に入らないのを憂へるに及ばない。仕事を手にしてゐないのが眞の憂へである。世の中は働きに依つて立つ。

人は働きによつて生きる。我は自分ながらも克く働いた、臨終刹那の夕に、斯う自ら思へたならば、ソコに屹度安心がある。

眞中を避けて

以下幹部の日常心得又は心持として、至極卑近の事柄を擧げて見たい。

幹部は女關の眞正面からは上り下りせぬこと。眞中を避けて少し右さか左さかに寄つて履物を脱ぐこと。眞中を避けるは、上位の人に譲る心持である。上位の人に譲るは、自分が下位から離れない心懸けである。

心持ちだけでも

幹部は座席に就くに、いつも上席を一つ二つ空けて次の席に就くこと。自分がたこひ其の日の主賓であつても、上位は成るべく避けること。若し已むを得ない場合には座布團なり椅子なりを心持だけでも後に引いて、後に退つて座に就くこと。

ヤア御苦勞さん

會を開き式を行ふ時なご、指導者は上座に立ち、一般團員は下座に着く。向つて左側に來賓右側に幹部が椅子に腰掛ける。やがて會が終り式が済むと、幹部は得て指導者の後に隨ひ、來賓と共に上の入口から出て別室に收まる。直に指導者側と共に上の入口から引き取らないで、ヤア御苦勞さんでした、といった風に、一應一般團員の間交じるやうにありたいと思ふ。

先づ團員

役員は、役員であると同時に團員である。否、役員たる以前に先づ團員である。役員の肩書は臨時であるが、團員の肩書は常住である。役員に當つたからして、團員たることを忽にして、團員と共に同じ地を踏むことを決して忘れてはならぬ。

獨學自習研鑽

上から離れないことは、天井裏に宙下るころではない。足は確かミ地を踏んでゐて、しかも頭は自ら上に接するのでなうてはならぬ。踏臺に立ち上つて、強て頭を天井に届かせるのではない。地から次第に伸びて自然にソコに到るのである故に、幹部は常に自ら伸びることを忽にしてはならぬ。獨學自習、研鑽修養に心懸けて、机の上には次ぎく讀物を缺かさない様にし、一寸外に出るにも、いつも雑誌の一二冊を風呂敷包に挿むやうにありたい。

往空歸實

常に謙虚の態度に住すること。『往空歸實』とある。往きがけが空ツボであるから、歸りには實が入る。謙は益を受けるのである。往實であれば歸空である。満は損を招くのである。折角聴くべき時間を持ちながら、アノ人の話は珍らしいないなき、いつて、外でブラ／＼し、控室で空しく煙草を燻らすなきは往實である。往實では、いつの間にか時代に残れ、上から離れる。

水滴残る

進んで先輩を訪問すること。村内の師匠坊に説教僧が見えたらば、それをも直に訪問する程にありたい。訪問に就いて、第一の禁物は長座である。コツプの水を捨てるのに、一氣に倒にして捨てるに反つて底に水滴が残る。これを徐々に傾ければ、一滴も残らないやうに出してしまう。人を訪ねては、コツプの水を一氣に捨てるやうに、きつぱり歸りがけを鮮にしたい。歸りさうにしては亦話を出して見たり、話が途切れてもマゴ／＼してゐるなきは、コツプの水を徐々に捨てるやうなもので、先方の愛想が出切つて乾いてしまう。早や歸るのか、モ少しは話すがよいと思はれる程手短に切り上げて引き取れば、二度會つて貰へる程の愛想が底に残る。訪問にはいつも土産物を持参すること。下情は好個の土産物である。理窟は概して喜ばれないが、實驗談は多く上位者の好物である。

惜しいこと

先輩を取り逃さないこと。折角手に入つたものを、後の注意の足りない爲に惜しいことには取り逃すことが多い。折々用のない手紙を出すこと。

上からも下からも

上から澤山手紙が来るから来てまだ喜んではならぬ。下からも来ねばならぬ。下から澤山手紙が来るからこいつて、まだ喜んではならぬ。上からも来ねばならぬ。

小聲で歌ふ

幹部はいつも周囲を見廻はすこと。例へば、青年團總會の席上、一同で君が代を合唱する際、來賓席には、君が代なき曾て歌つたことのない村の年取つた人もある。團員は大きな聲で歌つてゐるが、年取つた人は手持不沙汰に嘿つてゐる。雙方の中間にゐるものが、團員も大きな聲で共に歌へば、團員も一緒にになれるが、老人も離れる。老人も共に黙してゐれば、老人の仲間にはなれるが、團員も離れる。ソコで口の中で僅に小聲に歌ふ。詰まり、歌ふでもなく歌はぬでもない。此の歌はぬでもないことによつて團員も伍し、歌ふでもないことによつて老人も伍す。歌ふ者も歌はない者との中間に立つて、小聲で歌ふことは、此の場合亦上意を下達する所以の

ものである。「國民たる者は誰も君が代を歌へ」これは上意である。小聲は其の上意を最も行ひ易く具體化したもので、アンナに口の中で切れぐに歌ふ位のことは、俺達にも出來得る、ソコで老人も歌ふ氣になる。

正座してゐる人に交じつては正座する。それは云ふまでもない。胡座をかいてゐる人の中に交じつては、たゞ正座し得る者も胡座をかく。胡座をかけたまま、で正座を勧めた方が、正座してゐる正座を勧めるよりか效能が多い。

禁酒でもなければ飲酒でもない。不徹底らしいけれども、幹部の酒煙草に對する態度はそれであらう。絶対に禁酒すれば、絶対に飲酒するものも話が合はぬ。絶対に飲酒すれば、絶対に禁酒するものも話が合はぬ。

悪事をも行ふ

善人に與みするばかりでなうて悪人にも與みする。善事を行ふばかりでなうて悪事をも行ふ。悪人に與みするこいふは、悪を助長する爲ではない。悪事をも行ふこいふは、悪人善人元こそ是れ

一如、今彼悪をなして悪人たるも、次には吾れ悪をなして悪人となり、彼れ善をなして善人たるかも知れぬ。善人顔して小賢しく他を裁かうなき、しないで、常に同情の念を以てこれを迎へたいといふのである。他が悪事を働いたならば、それは自分も共々に働いたのである、他の中に自分を見出したいといふのである。

一人が物を提けたま、電車に入つて来た。ソコで席を譲つて自分は吊り革に下つた、暫くしてゐるに、其の一人の傍の席が空かうとした。普通ならば、其の空いた席に其の一人が代つて、先きに席を譲つて呉れた人をして元の席に復つて貰ふ筈のものである。然るに其の一人は、其の連れ添ひで見える者の袖を引いて、早く其の空かうした席に座らせようとした。席を譲つて呉れた人が目の前に吊り下つてゐるに對しては知らぬ顔である。何んだかムツトしたい氣もする。道も術も知つたものでないに癪に障らうともする。併し今こゝで、自分が腹を立つては此の一人を離れる。離れては最早互に縁なき衆生である。自分も亦斯る仕打に似たやうなこゝを度々仕出來す。俺もソナナ事をよくやるが、君も亦よくやるなこいつたやうな氣持になり得れば、此の一人に對する惡みが薄らいで、代つて親しみが生じて來る。親むこゝによつてのみ此の一人は温め

られて息を吹き返す。

鐵が鐵頭鐵尾

詰らない話をしては人が近寄らぬ。さらばこゝで、善い話ばかりしても人は亦近寄らぬものである。一人が人前に立つて話してゐるのを、傍で聞いてゐた他の一人が曰く「成程あれなれば人が近寄る。俺共が話しては、近寄るこゝろではない。こちらが」こ口云へば先方が「こ足後に退る。反つて離れる一方である」こ。「人が近寄るこいふは、詰らない話をするからである。詰らない話には親み易い。反つて離れるこいふは、それは話が善過ぎるからである。善い話は聞いてゐてまごかき窮屈さを感じる。離れる一方であるこいふは、詰まり話が善過ぎるのである」。立つて話してゐた一人は斯う答へた。

さらばこいつて、折角話をする以上、詰まらない話をしては濟まぬ。彼の三日間五日間の青年團の講習會の席上なきに於いて、娛樂會なき、いつて、夜間一二時間よく詰まらない話をするこゝがある。夜間詰らない話をして親んでゐる爲に、晝間窮屈な善い話をして離れない。「日本

の國には鐵が鐵頭鐵尾少い」なご、無駄な口合を挟むのは、斯うして善い話を飽かさないうで聞かせる爲である。詰らない話ばかりでも人は逃ける。善い話ばかりでも人は逃ける。

相手になる

或人いふ、「こちらから先に、女の話は忘れても持ち出さない。併し先方から既に持ち出した上は相手になる」云。

春宵朧月

暑くも寒くもない所謂中和の氣候が、一般人の體に適する。熱くも温くもないお湯に、ヂット分一分體を浸ける時の心持の好さは何んにも云へない。「照りもせず曇りもあえぬ春の宵の朧月夜に如くものぞなき」云歌ふ。其の「春の夜」の春は、暑からず寒からず。「朧月夜」の月夜は、晝でもなければ亦全く眞の闇の夜でもない。九十の春光は一年中に於いて最も心地の好い時、月夜は「親し月夜はいつも好い」云ある通りである。古來日を吟詠して風懷を遣つたものは妙いが、

月には誰れもよく懐く。

半熟を尊ぶ

幹部はいかにも微温的である。妥協的である。煮立たないのが本來の面目であるかも知れぬ。微温的であるといふは、いかにも好ましからぬやうであるが、始中終微温的であることは、微温的に徹底するものであつて、煮切らないものが、其のまゝ煮え切つたものである。肉は餘り生の間は味が無い。腐つて終へは亦味が落ちる。生でもない、腐つてもゐない、いつれかこいへは腐りかけたものが最も甘いといはれてゐる。現に卵は半熟を尊ぶ。微温にも妥協にも、ソコに徹底すれば總べてに生命がある。

溝もない

既に微温であり、妥協であれば、自ら他区別を生じない。其の周圍が常にボカされてゐるのが、幹部の普通の態度である。苟くも衆共伍し共に事をしようとするには、常にボカされ

てゐるここが大切である。溝もない塙もない。限界がハッキリしなければ、他が知らない内に其の領分に入つて近寄る。

山上生活

幹部は微温的である。併し最初から一度も熱しないのではない。在家止住の親鸞上人は、曾て一度も出家入山されないのではない。二十幾年間を山上に血の出るやうな生活を遂げられた。鐵瓶で湯を沸かしてゐる。初め頻りに音を立てる。暫くすると殆んど鳴りを静める。後又暫くすると微に音を立て初める。再び微に音を立て初める。お湯はこゝに眞に煮えたのであつて、其の眞に煮えるのには、初め頻りに音を立てねばならぬ。既に幹部としては酒を飲むでもなし、飲まないでもなし、微に音を立てゝゐるにしても、幹部候補生としては、山へも走せ上り、後鉢巻で駆け出して、大に鳴を立てねばならぬ。幹部は曾て一度は五年も十年も全く禁酒したことがあるもので、亦いつでも樂々禁酒し得るものであつて、しかも盃を手にしてゐる所のものである。

オットこれは大臣

下士は將校の前に出ても左程恐れない。又兵卒の前に出ても左程威張らない。同様に、幹部はたゞこゝひ大臣の前に出ても、村長の前に出た時の心地でありたい。村長の前に出た時は、大臣の前に出た時の様な心地でありたい。大臣大將の前でツイ知らないで頬杖ついて、オットこれは大臣大將の前であつたナミ、俄に畏まるやうなことがあるがよい。上を恐れない、又下を侮らない。これが幹部の常の態度である。

幹部の食事

甘い辛いを言はぬ。甘いものもよい、辛いものもよい。曾て一度小言をいつた例がない。格別に好まないものもなければ嫌な物もない。美食も強て遠慮しないが、粗食にも毫も屈托しない。いくら美食し、粗食しても、少しも腹を痛めない。如斯が幹部の食事である。

下士的の髻

幹部の頭髪は一生を通じて五分刈である。其の口髻はジャッキ一枚でいつも刈り込むのであらう。全く剃るでも、全く生やすでもない。一人の床屋はいふ『ごうしてお生やしならぬ』。又一人の床屋はいふ『ごうしてお剃りならぬ』。生やして八の字に近いものは將校的である。剃つて全く髻のないのは云はゞ兵卒的である。生やすでもなく、生やさぬでもない所に、下士的の髻が存する。

一本四圓五拾錢

幹部の手にする蝙蝠傘は、一本四圓五十錢の毛織子物が相應しい。細巻にして毛織子の袋に入つてゐる。一見絹張のやうに見えて絹ではない。毛織子か見れば絹によく似てゐる。絹張は如何にもキマリ悪くて手にし兼ねる。さらばこて一圓二圓の毛織子では物足らない。毛織子張の上等、これが全く幹部的のものである。

大儀がる

つこめて美服を纏はないこゝ。衣服は唯外から一時着せたものに過ぎない。立派な衣服を着けたからこて、それで少しも其の人間が立派なものになつたのではない。然るに立派な物をつけるこゝ、如何にもそれでエラクなつたかのやうに思はれるものが見える。野良着を着てゐる時は、途に學校先生に出遇つて丁寧に挨拶してゐるものが、着飾つて巻煙草なご吹かしてゐる時は、兎角面を反けて頭を下げるこゝを大儀がる。奢は斯うして上から遠ざかり、亦下から離れる。

二葉の投宿氏名票

下士は其の恰好が將校に似てゐる。軍服の肩章に金線の入つてゐるあたりがよく似てゐる。軍費が向ふから來るこゝ、アレは少尉じやイヤ中尉じやミ路傍の子供達はよく言ひ争ふ。將校が見られて將校として遇せられても、決して好い氣になつて調子に乗つてはならぬ。一こ通りは考へてゐても、周圍から頭を下けられて鄭重な言葉をかけられるこゝ、少しも銜氣はないのであつても、

ツイ知らず識らずの間に、自ら頭が高くなる。

下士は亦兵卒に似てゐる。軍服の上衣を革帯で締めてゐるあたりは全く兵卒と異らない。兵卒と見られても決して腹を立て、はならぬ。或一人の幹部が、將校級の一人と同車で或地に行つた。將校級といふは帝大の教授であつて、其の地の教育講習會に出席するのである。一人の幹部、これも同じ地で同時に開かれる青年講習會へ出席したのである。同じ宿に導かれて、將校級は將校級の納まる大きな廣間に収まり、幹部は幹部の収まる狭い一之間に収まつた。やがて女中が幹部の居間に二葉の投宿氏名票を持参に及んだ。一葉ならば分つてゐるが、二葉は、全く廣間の將校級の從卒視して、隨行の書生をして先生の分をも記入させようとしたものである。幹部は、これは面白いニコニコ顔で一應二葉も手に受けた。

人に親み世に接す

『一日一善』はご幹部に相應しい心懸は他に多くはあるまい。一日に少くとも何か一つは善い事を行ひたい。其の善い事は一ミ口に云へば他人に對する親切である。汽車に乗つて腰かけてゐる

るに、其の傍を一人のお客さんが通りがけに小脇にしてゐた新聞紙を落した。こちらは腰かけてゐるのであるから手が届き易い。ソツト拾つて上げる。其のお客さんの誰であるかは元より知らぬ。互に見ず知らずの間柄であるが、一枚の新聞紙を拾つて渡したといふだけのことで、既に此のお客さんごこちらごの間に一脈の血らしいものが通ふ。ソツト拾つて上げる。これが所謂一日一善の心懸であつて、一日一善は全く人に親み世に接する所以の大切なものである。

一歩後退

人の言葉を一ミ口で打ち消したり、人の動作を一ミ目で裁かうことは、動々もすれば人に離れる。打ち消したいことも勉めて一應は受け入れる。腑に落ちないことであつても、『さうかな』と一歩後退する。山に行けと言ひ附かつたならば、たこひ氣に入らなくても、一應は、『山に行きませうかな』と受け取る。そして後から『が併し』と返すべきは返し消すべきは消す。時と場合によつて、一概にさう行き兼ねるごのあるは云ふまでもないが、心持だけはいつもさうありたい。二人相對してゐる場合では、こちらが一步進めば先方が一步退かねばならぬ。退くのは多

くの場合心地の善いものではない。併しこちらが前に一步後退して置けば、たゞ以後から、が併し、ミ押し進んだ所が、先方は前に一步前進してゐるのであるから『さうか、それでは山行きは何も今日に限つたことはない』ミ自ら原案を撤退して、格別後に退くやうな心持を起さないであらう。初めに『さうかな』ミ離れないで置けば『が併し』でも亦離れない。打ち消すミ打ち消されまいとする『山へは行きません』ミ一言に否定すれば『ナゼ行かれないか』ミ来る。そこに端なく溝が出来る。溝が出来ると互に理窟がましようなる。

机に凭つて本を讀んでゐる。スルト傍から『本ばかり讀まないで少しは子守をして下さい』言はれた。今丁度起つて子守をしようとしてゐた所であつても、本ばかり讀まないで、ミ非認されて見るミ、ワザミでも起ちたくない。起たうミしても起ち難くなる。然るにそれをば『御無心ですが』ミ出られるミ、子守どころではない、それ以上の難題を課せられて『水肥を八九荷丘の畑に擔いで下さい』言はれても、それは起ちよい。ヨシ来たミばかり直ぐに起ち上るであらう『御無心ですが』ミいふのは、机に凭つてゐるミふ動作を一應受け入れたものである。この意味からいへば、命令的の言葉は成るべく避けたい『かうせよ』よりかは『かうして貰はうか

ナ』ミありたい。併し敵を眼前に控へ、馬上劍を騎して『御無心ですが前へ進んで貰はうかな』ミばかりにも號令はかけられまい。併し形は兎に角、心の中ではいつも『御無心ですが』ミいふ心地を失はないやうにありたい。

子供が障子を破つてゐる。一應は是認したいけれど、そうしてゐるミ益々破る。急いでソコラあたりを見廻して見るミ、オモチヤを纏めて床の上に置いてゐる。これ幸ひミ『太郎さんは感心じゃ、オモチヤをキチンミ揃へてゐるナ』ミそこを認めて、一步後退してソコを受け入れて離さないで置いて（叱るミ離れる）『が併し障子を破るのはよくないナア』ミ一步を進める。

女中さんが川端で突つ屈んで野菜物を洗つてゐる。葱が一二本流れてゐる。ソコを通りか、つた一人の老人が『ソナに物を粗末にするでない』ミ言つたなら『老人が大きに入らぬお世話じや』ミ尻目にかけるかも知れぬ。ソコで取り敢ず『マアイ、お尻を持つてゐる事』ミソコを先づ是認して『葱が流れてゐる、物を粗末にするでないよ』ミ出たならば、此の女中さんは案外素直に受け入れるかも知れぬ。

一口で打ち消さない。一目で裁かない。一步後退したい。これが亦他の人格を尊重するミいふ

ここになくてはならぬ。人格を尊重し合つて眞の親しみは生じる。

新に十八日

總會を十五日に開かうではないか。斯う相談された時、十五日は不可ないことがハッキリ分つてゐても、十五日に開くかナ、さいつた風に、いつも退一步して一應は素直に受け入れることは、眞に他を尊重する所以のものであるが、併し唯單に一應受け入れたゞけで、十五日に代へるに豫ての自分の案の二十日を其のまゝ持ち出しては、一旦口にした物を亦直に吐き出したも同然であつて、それでは折角受け入れたところで一向自分の身の滋養にはならぬ。自分は豫て二十日に定めてゐたが、唯今十五日説を承つて見れば、十五日説も不可ないが、さりして二十日説も果して充分なのであらうか、ミソコで十五日と二十日をかけ合せて見るによつて、素直に受け入れることは一方大きな修養の道なのである。十五日ではない、さらばさいつて二十日でもない。茲に新に十八日なるものが生れることによつて進歩があるのである。『雪にたへあらしにたへし後にこそ、松のくらくらも高く見えけれ』とある。雪にたへることは、遮二無二擧に雪を打ち消すこと

ではない、若しそれであれば、松はいつまで経つても元の空阿彌である。たへることは、無暗に撃退もしない。亦徒に回避もしない。受け入れて置いてチツト合戦することである。其の間に力が生まれる。一步後退は斯うして亦人が大きく育つ所以の大切な道でなくてはならぬ。

破れてゐる

張りたての障子を早や破つてゐる、さういへば、傍に障子を破つた者がゐても、知らぬ顔して隠す。早や障子が破れてゐるさういへば、それはツイわたしが破りました、破つた者が出て來易い。一言一句も成るべくだけ他にアタラぬやうに心懸けたい。アタラミアテられた者が反つて叛く。履物を取り散らかしてゐるさういへば、取り散らかした者にアタラぬ。取り散らかした者が不快に感じて不平の念を起すに過ぎない。取り散らかつてゐるさういへば、誰にもアタラぬ。アタラぬは打ち消すことなのである。アタラぬことは是認することである。板場を汚してゐるさういふよりも、板場が汚れてゐるさういひたい。誰がこゝへコンナ物を置いたのか、は拙なものであつて、こゝへコンナ物が置いてあるの方が穩當である。

嫌てす

題を何と掲げて置ませう、ご尋ねられて『題を掲げて話すことは嫌です』と答へたあとで『さうではなかつた、嫌ですごいはないで、不得手です』とごいふべきであつたご氣附きたいのである、嫌ですごいへば、現に題を掲げて話してゐる人、題を掲げて話すごこの、好きな人に對して、自ら反對するごこにもなり、それ等の人のやり方を打ち消す様なごこにもなる。碁盤をさし出されて、一面お願ひしませうごいはれた時、わたしは碁は嫌ですごいへば、嫌な人は味方になつて一緒になり得ても、好きな人からは、嫌なら勝手にするがよいごいつた風で突き離される。『わたしは碁は下手です』とごいへば、下手な人は初めから離れないで、又上手な人からも、下手ならやつて見て御覽なさい、チト御指南致しませうかな、ごいつた風に、ごちらからも離れない。

好事不如無

床の懸軸に『好事不如無』とある。好きな事は無いがよい。一方に好きな事があれば、一方に厭ひな事がある。好きな事があるから厭ひな事があるのである。酒を好いて菓子を厭へば、菓子好きな人離れる。明君ご仰がれ賢相ごいはれる程の者は、好事を持たないものである。たごひ好事を持つても、決してこれを外に見はさないものである。お殿さまが謠曲を嗜めば、謠曲上手の家來が傍近くに附け入つて来る。そしてそれ以外のものは自然に遠ざかる。視學が酒を飲めば、酒飲みの校長は仲善しになる。

別して不致事

『かたよらぬ様』に、東照權現の言ひ遺されたものに斯うある。

第一自身不得手の事は、人の致すもいみきらひ候者、間々有之事に候、夫れは大名の別して不致事に候、我等中年の頃迄碁を一向不存、人の致すも不用のもの、氣づまりにて用にも立たぬ事とばかり存じ、好み候ものは、うつけもの様に存じ候處、近年碁を覺へ候得ば、雨降の

徒然に慰みにもなり、先達てうつけ者と存じ候を相手に致し候、是にて察し候に、何事も詮なき事は古より致し置かぬ事に候、吳々も自分氣に入り候者を善と存じ、氣に入らぬ者を惡しと存じぬ様に致こそ、第一の事と存じ候。

既に人として存し物として在る上は、是非とも存在せねばならぬ、存在すべき所以のものがあ
るのである。さう思つて淺臺に唯好きにか厭ひをか、一概に輕々に言はないでありたい。

一 の 字

冷熱共に甚しうてはならぬ。無暗に笑つても又無暗に泣いてもいかぬ。動々もすれば笑ふも
のは動々もすれば泣くものである。浮き過ぎても又沈み過ぎてもいかぬ。得意淡然、失意泰然こ
して常に心を一の字に持ちたい。(勝海舟翁の教訓) 少しく氣に入つたからこゝて直に高聲を出して
一の字の肩を聳えさせたり、物事が聊か齟齬したからこゝて、忽ちにして一の字を右さがり左さが
りにさせて萎れてはならぬ。一の字は平かである、平氣といふがそれである。平氣であれば人こ
交際し易い。平民には誰も親しみ、平易な事には誰も懐く。平地は誰も好いて歩く。

緩急得る中

佛説に曰ふ『沙門夜誦迦葉佛遺教經其聲悲緊思悔欲退佛問之曰汝昔在家曾爲何業對曰

愛彈琴佛言緩緩如何對曰不鳴矣弦急如何對曰聲絕矣急緩得中如何對曰諸音普矣佛言沙門學道
亦然心若調達道可得於道若暴暴即身疲其身若疲意即生惱意若生惱行即退其行既退罪必加矣
但清淨安樂道不失矣』(佛説四十二章經) ミ云々。急緩中を得て琴初めて調ふ。中を守つて偏せ
ないのは、外に對しては互に相親む所以のものであつて、内にあつては自ら道を得る所以のもの
である。

從つて太る

下を踏臺としてはならぬ。上の威光を借つてはならぬ。幹が上からの養分を懐に收め、下か
らの養分を自分の所得としたならば、其の樹木の成長は止まつて終ふ。從つて幹の生命もソコで
盡きる。上の爲に謀り下の爲に盡すのは幹の天分であつて、其の天分を盡すこゝによつて亦よく
其の身を保つ。根が張つて葉が繁れば幹も亦從つて太る。

低い受附口

老子の語に『功成つて處らず、處らざるが故に去らず』とある。最初からして椅子に腰かけないから、椅子から追はれる氣遣はない。高い式場の上に立たないで低い受附口に就けば人目に留まるこゝが少い。矯々たる珍木の顛、得て金凡の懼がある。成るべく寫眞の前列を避けて勉めて後列に就けば、所謂美服人の指さ、んこゝを患へず、高明神の惡しみに逼られない。

既に功に處れば、其の功は酬らられたので、さし引き帳消になる。其の功に處らなければいつまでも其の功を保つこゝが出来ぬ。功を保つが故に其の地位を保つ。榮轉の乏しい所には休職や免職も亦乏しい。幹部は元來功に處らない筈のものである。功に處らないが故によく萬年軍曹たり得る。萬年軍曹は獨り幹部の誇である。

畢竟有官の太夫

自分が肩書を用ひやうとすれば、他人は用ひさせまいとする。自分が用ひまいとすれば、他人は用ひさせやうとする。用ひさせまいとするは、自分から離れるこゝである。用ひさせやうとするは、他人から進んで近寄るこゝである。他人が用ひさせるものは永く失ふ氣遣

はない。無官の太夫は畢竟有官の太夫である。

肩章に星が一つあれば一つだけの待遇を受ける。一つもなければ、一つ以下の待遇も受けられ、又一つ以上の待遇をも受ける。一つ以下の待遇を受けるこゝは、下誰とも觸れ合ひ得るこゝである。一つ以上の待遇をも受けるこゝは、上誰とも接し得られるこゝである。

弱さうて強い

理窟をいひ得ぬ。偶理窟をいつても多くは負ける。大に立腹してもよさうな時にも充分立腹し得ない。少しく反對され、ば折角の案も引つ込めて終ふ。いかにも元氣なく弱さうに見えてゐる、しかも二十年三十年間を通じて見る、豈に測らんやいつの間にか随分大きな仕事をやつて退けてゐる。これは弱さうで其の實強いのである。

それかと思ふ、少しも假借しないで、堂々乎として論議する。一度言ひ出した以上何處までも突つ張らうとする。いかにも元氣で強さうに見えてゐる、しかも二十年三十年間を通じて見る、豈に測らんや格別これこゝいふ程の纏まつた仕事何一つしてゐない。これは強さうで其の實弱

いのである。

小魚が砂の上でピン／＼と跳ねてゐるが、間もなく死んで終ふ。ピン／＼と跳ねてゐるのは強さうに見えるけれど、其の強さうに見える間に、刻々死に急いでゐる。強さうで弱よりよりも、弱さうで強い方が幹部の望ましい態度である。

湯漕の教

幹部は用事が多い。棟梁の材をはじめ、あらゆる諸道具は皆幹で作る。併し其の用事に對して、一々報酬は伴はない。幾夜か役員會で目を乾したり、折角の休み日を、終日謄寫版刷に購しても、唯の一人禮を言つて呉れるでもない。椽の下力持ちで、馬鹿らしいこゝろ夥しいと思はれないこゝろもない。

今から二十幾年前、當時小學校長として傍ら青年會、處女會の事で奔走してゐた一人が、村會議員中の有力者稱せられてゐる一人を學校への途中道伴れになつた時、村會議員のいふやう「却々熱心におやりで結構なこゝろじや。併しよう考へてマアい、加減にやるがよい。やつた所で」お終ひには一枚の紙切れを、五圓八圓の記念品料で追ひ拂はれるに過ぎない。親切心からのこゝろであつたか、コンナに言つた。なるほど感謝状は一枚の紙切れであつた。記念品料は五圓か八圓かであつたであらう。併し、感謝や記念は他からばかりではない。「己れの今日ある、實に當時いくらか奔走して置いた賜である。二十年前に於いて聊か處女會を扱つてゐたお蔭で、今日人前に立つて多少處女會を口にするこゝろも出來得る。自分自身で斯う感謝し、深く自ら當年を記念してゐるのではあるまいか。

求めるこゝろ求めないこゝろに拘らず、働いただけの事は屹度所詮が見はれる。盡した力に對しては、いつかは何等かの形で酬られる。其の酬るの大きなのに、反つて濟まない感じを起す程であらう。二宮翁の湯槽の教通り、お湯に入つて、お湯を自分の方へ掻き寄せようとするこゝろお湯は反つて向ふへ逃げる。然るに、向ふへ押し遣るこゝろお湯は手許へ流れ込む。青年團の爲に盡してゐる積りであつても、それが自分の修養の爲亦アレコレの爲になる。別にアテにするではないが、働ける時には働いて、盡される時には少しでも盡して置きたい。

不動尊の願

役員なごは高等の小使である、ご誰か、いつた。果してさうであらうか。不動尊の姿は、印度で下僕の形に似せて作られたものである。幾度でも下僕に生まれて、人の爲に奉仕しよう。これが不動尊の願である。小使は尊い。高等であれば一層尊い。「神若し二人の天使を地上に送らば、一人は帝國を支配し、一人は街上を掃除するであらう」ご。人に使はれまい、ごするものは眞に氣の毒の人である。

終日馬になつて

立派な將校は、下士を兼ね尙ほ兵卒を兼ねる。乃木大將はそれであつた。立派な役員はいつも團員でなくてはならぬ。團員兼ね役員でなくてはならぬ。役員顔するごは永く法度である。小学校の子供が、隊を組んで騎馬競争をしてゐるのを見るご、馬になるものは終日馬になつてゐて少しも不平らしい顔をせない。馬に乗つてゐる大將が大將らしい顔をせないから、馬は自分が馬

たるに氣づかないのである。地主が地主ブルから、小作は俺は小作であるご氣附く。大將がゐなければ馬もゐない。大將が大將顔をするご、馬は自分が馬たるに氣附く。馬ご大將ごの間に争議が起る。何んだエラそうに、ご。ソコで馬が尻を振つて大將を落さうごする。役員改選の結果、今度は前の大將が馬になる。俺が役員であつた時邪魔ばかりした。今度は俺が邪魔してやるのじやご。内輪のゴタ／＼は斯うして始まる。

先きに言ひたがる

いつも退一步して、他の言を一口に打ち消したくないごいふのは、一つには、亦さうして他をして思ふ所を遠慮なく言はさせる爲でもある。打ち消すご後が出難い。素直に受け入れるご次が出易い。兎角肩書を持つもの、弊ごしては、先きに言ひたがる、自分の意見を通さうごしたがる。自分の意見は全く後廻はしにして、其の内自分の意見に似寄つたものが見はれたならば、ソツト自分の考を足して、其の方を盛り立てる程の心懸けがなくてはならぬ。

本眞劍の父兄

青年團の役員なき、いふも、眞に自分がドレ程團員の爲を思つてゐるであらうか。父兄が其の子弟を思ふに比べるに傍へも寄れない。それ程本眞劍の父兄がドレ程團員にも附いてゐる。忘れても父兄を無視するなきのこがあつてはならぬのである。一人の團員が庭先で仕事をしてゐる。ソコを通りかゝつた一人の役員が「何君、今夜俱樂部で何會を開きます、早く出席なさい」と案内する。然るに、此の團員の後には、親年寄が一所に仕事をしてゐる。若し、此の親年寄が理窟がましいものであつたなら、「大きにお世話である。俺の子である。出してよければ俺が出します。何にもお前さん達に引つ張られずともよい」、と咄くかも知れぬ。マサカさうも思はないであらうが、先づ順序としては「御精が出ます」と親年寄に一番に言葉をかけて、次に息子に案内すべきである。いつも父兄を無視するから、度々學校へ呼び出されるこが、外にばかり出て何をしてゐるのか知ら、こいふのであらう。

親達は亦喜ぶ

草や木も若い間は芽を出したが、人も同じで、青年時代には得て徒長枝的のものが出易い。其の青年の集まつた青年團が、内面的よりも外面的に傾き易いも、無理からぬこである。斯うして青年團の成績なるものが、家の敷居の外には見はれ易いも、其の割合に家の敷居の内には見はれ難い。道伴れになつた一人の幹部は、恐らく次のやうに打ち明け話をするであらう。「私達は、青年團の幹部なき、いつても、一向お世話も出来ないで眞に濟みません。多少でも團の爲に盡さうとするこ、大なり小なり家業を缺かさねはなりません。スルト家の人達の機嫌がよくないのであります。機嫌がよくないのは無理からぬこで、青年團の成績が家の内に見はれてゐないから、家の人々青年團は多く没交渉なのである。家の内に見はれて来れば、團員を持つてゐる親達は喜ぶ。役員は親達を路傍に出逢つても、「宅の若い者等がアナタのお内の若い衆にお世話になりました」と、こお禮の一ミ口でも言ふ。さうするこ役員は親達は亦喜ぶ。『世話の出来る時は世話をするがよい』と奨励を加へる。詰まり、青年團の成績を家の敷居の内にも見はさうこ

努めることは、特に今日の青年團にあつては、幹部の宜しく心懸けるべき事柄である。

今一尺で出る水

掘りさへすれば水は出る。井を掘りて今一尺で出る水を、掘らずに出ぬといふ人ぞうき。こある。出ないのではない。掘りやうが足らないのである。苟くも熱心に當つたならば、相當の案は自ら立つ。方法は見つかる。優良團體を視察して、施設事業を見習ふも結構であるが、モット結構なのは、自分で生み出すことである。生み出したものには精神が籠つてゐる。必ず反應がある。

十室の邑

人生眞に力を盡すべき箇所は、十室の邑にも充ちてゐる。一生盡し切れない程のものが、其處にあることを先づよく理解することが肝要である。左は一幹部の手に成れる小品文である。

半は帆を巻いて

一
今年一月三日お正午過ぎ伊勢は山田に着いた。神都講習参加の爲めである。急いでゐたので人車に乗つた。車屋さん語るらく、今年の新年は例年よりか参宮客が少い。これも矢張り不景氣からのことでありませう、ミ。宇治橋頭に自動車の切符賣り話す。お客は大して少いといふ程でもありません、併し大抵は其の日歸りで、こに泊まる客は眞に少かつた。これも矢張り不景氣からのことでありませう、ミ。少し不景氣らしうなつてくるミ、直に斯様に徴候が見られるものかと思つた。

二
五年も八年も暑中扇子を使つたことのないものは、身體の虚弱の割合によく暑さに堪へる。洋傘は携帯してゐてもそれは雨天の用意であつて、日中に用ゐたことは三四年前一度阿蘇山腹に於ける天幕講習に参加の際、當時山神激怒、山を登るに餘りに澤山の灰が降つてゐたので、仕様事

なしに用ゐたる程の者は身體の割合に夏も平氣である。五年も八年も室内は無論のこゝ室外までも懐手した覺は餘りない、洋服のズボンのかくしに手を突つ込むなごは殆んど曾て覺ないといふものは、身體の割合によく寒さに堪へて未だ一度も流行感冒に罹らぬ。口にいへば、それは平常から身體が鍛へられてあるからこゝいふのであらうけれど、其の鍛へられてあるこゝいふは、更にこれを内面から細に解釋して見るに、要するに平常に『分けて擔ふ』こゝいふこゝなのである。平常に暑さを分けて擔ふ。平常に寒さを分けて擔ふ。例へば平素餘りに氣儘な寢方をしてゐるこゝ、偶々汽車なごに乗つて居眠らうとする時に甚しく窮屈さを感じる。平素いくら廣々とした場所に自由自在に寢ることが出来るからこゝいふても、勉めてキマリよい寢方をしてゐるこゝいふこゝは、一旦窮屈な目に遇つても、それを左程に感じないこゝいふこゝである。詰まり其のマサカの折の窮屈さを平素三百六十五日に於いて分けて擔ふからである。少し暑いからこゝいふては動々もすれば肌を脱いだりしてゐるは、眞に暑い、そして肌の脱がれない場合なごに人並み以上の暑さを感じる。少々暑いからこゝいつた處で、減多に上衣なご取らないこゝいふこゝは、眞に堪へ難い程の暑さの中に座して、それをば左程に感じないこゝいふこゝである。詰まり平素に於ける暑さの分擔である。

る。

三

景氣が好いからこゝいつて、無暗に帆を巻き上げるに、少しく不景氣の風が吹いて來るに、直にも帆を引き下げねばならぬ。少々不景氣らしうなつて來るに、直にも其の徴候の現はれるこゝいふこゝは、世間が如何に暑い時は直にバタ／＼扇子を使つたり、上衣を脱いだりしてゐるかを示すものであつて、これは少しも好ましいこゝではない。景氣の好い時に常に不景氣の時を忘れないのは、不景氣を平素に於いて分擔するものであつて、斯かる者には容易に不景氣は到らない。濫費するが故に消費節約の必要も生じる。消費するも濫費せないものは、今更事々しう節約の必要を見ないのであらう。それは平素に於いていつも消費節約を分擔してゐるからである。

四

得意の時餘りに昂然たるが故に、失意の時に見苦しい程茫然たるのである。病氣の折の苦しきは、これを無病の時少しづつ分擔して置くがよい。病氣に罹つては思ふやうに食事も攝れぬ。されば思ふ存分に飽食するこゝは平素に於て慎むべきである。お膳の上に五品の御馳走が載つてゐる。

る。心の中に頂いて置けばよい。五品六品總べてにお箸をつけねばならぬことはない。幸福に執着するから其の間から不幸が生じる。富貴に處しては貧苦を忘れないやうに、若い時に老いたる時を忘れないがよい。若いからこいつて元氣に任せてゐては早く元氣を消耗する。永く老いまいとすれば若い時から老いるがよい。要する所世事萬事は半だけ帆を巻くことが大切であらう。

先づ帽子に手を懸けて

一

朝家を出て眞先きに出遇つた人に對しては、其の人の知るこ知らないを問はないで、先づコチラから帽子に手を懸けて挨拶したい。其の人が先輩であれば無論のこも、所謂後輩であらうこも、子供であらうこも、コチラから先づ挨拶したい。人通りの多い市中なごでは、一概にさう出来兼ねるこもあらうが、眼を瞑つた思ひの下に、心の中だけでも挨拶したい。

二

挨拶するこいふこは、頭を低くするの謂である。低くするこは高い所から下りるこなので

ある。高い所に留まつてゐては、双方の間が離れる。それでは決して親しみ合はれるものではない。前にも後にも挨拶したい。右にも左にも挨拶したい。一日中挨拶したい。併しさうも出来兼ねるので、セメては朝眞先きに出遇つた方に對して、知るこ知らないこに拘はらず挨拶したい。斯うして前後左右に皆挨拶したい心持を常に持たたい。斯うして日中頭を下けてゐる代りに致したいのである。

三

昔から『淀の抱鯉』こいふこがある。高い河の堤の上に留まらないで低い河の底に下りて鯉こ一つになる。『抱鯉』は畢竟挨拶である。此の挨拶に依つて漁夫と鯉とは初めて觸れ合つて抱き合ふ。

四

着物を着てゐては河の中に下りられない。低い所に就くこは勉めて着物を脱ぐの謂である。挨拶は全く裸體になるこである。『裸つ子』そこらあたりを遁け廻る』こある通り、裸體になれば眞に心地がよい。本人が心地よければ周囲も亦従つて心地がよい。『裸つ子』こらへ所に』困まつた

母は、強いて吐り顔を作らうとしても喜色が包み切れぬ。互に心地よい間に眞の親しみが生じる。然るに着物は容易に脱がれないもので、學歷を着る、地位肩書を着る。而して着れば着る程他に離れる。

五

車に乗つてゐれば頭が高い。途を歩いてゐる人に對して濟まぬやうな心地がする。それに車上更に帽子を冠れば頭が一層高くなる。車上では帽子は手に持つて冠るこゝを遠慮したい氣がする。

六

話をするのに、高い所に立つは止むを得ないことである。こゝでも、セメて聲だけなりとも低うしたい。聲を低うしようと思すれば、先づ低い座に就いてゐる心持にならねばならぬ。低い座に就かなければ低い聲は出ぬ。他の耳に入り易いのは高い聲ではなうて、寧ろ低い聲なのである。低い聲の耳に入り易いのは、低い聲は挨拶なのであつて、挨拶は親しみの本、親しみ合つた間では、互の間が素直であつて撥ね返さないからである。

七

道を尋ねるのに、帽子に手を懸けると同時に「一寸お尋ねします」こいふが普通であるが、それをば、先づ帽子に手を懸けて、而して後に言葉を出したならば、屹度一層丁寧に道を教はる筈である。教はるばかりでなうて、コチラも一層丁寧に道を尋ね得る筈である。一層丁寧に教はり、又丁寧に尋ね得るのは、先づ挨拶に依つて双方の間に既に幾らかの親しみを生じて、多少でも互に解けて、二人の間柄が素直に受け入れ合ふからの事である。

八

朝眞先に遇つた人に對しては、其の何人たるを問はないで、先づコチラから帽子に手を懸けた。此の心懸けが地主にあつたならば、朝眞先に出遇ふものは、自分の小作人でないには限らない。スルト此の地主は、一日の中にセメて一度でも裸體になり得る。朝の眞先の挨拶は、終日を裸體で暮らす心持の見はれである。裸體でさへ暮らしてゐれば、何にも其の間に八釜しい文句は起り得ない筈である。

針の尖を眺めて

一

針のよく刺すのは、鐵全體が尖端になつて働からである。唯口の尖や筆の尖だけでは、決してよく刺せるものではない。體全體が口になり筆になつて、ソコに初めて他を動かす程の力が現はれて来る。人前に立つて話にしても、話する時間は一時間か二時間か短い。併し如何に話すべきかを豫め考へる時間はカナリ長い。更に、それだけの考へを生み出すだけの行ひを行ふ時間は随分長い。これであつたならば、其の話しには必ずや生命が存する。然るにそれが其の反對で、行ふ時間は短いが考へる時間は長い、話する時間に至つては更に長いといふのであつたならば、それは唯單に針の尖だけで刺さうとするので、決してよく刺せるものではない。

二

先年ある一人の學校長が、學校長を止めて某所囑託の講師にならうとされた際に、心易い友達

の一人は斯様に言つた『それは結構の事のやうに思はれるけれど、よく考へて見るに學校長の職を務めてゐて、其の務めた事柄の尖が口に現はれて時々講話になるのは眞に結構な事であらうけれど、さうでなくて唯講話といふことばかりが本職になるといふことは、果して如何なるものであらうか』。大水の出た後で川の堤を通つて見るに、よくもこれ程の物を流したものであると思はれる程の大きな石を轉かしてゐる。いかに水の力が強いといつた所で、唯單に其の石の面に觸れてゐる、いはゞ水の尖だけでは決してそれを動かす得られるものではない。其の川全體の流れが後に控へてゐて、其の全體の力が水の尖端を借りてソコに現はれて来るので、初めて恐るべき程のものになつて来る。之れを稱して水の『積勢』といふ。總じて大切なのは此の積るこいふことなのであらう。而して此の大切な積るこいふことは、要するに不斷の仕事、平素の心がけに依らなければ手にし得られない。

三

講演は會場に着いた時から始まるこいふは既に／＼晚い。案内を受けて原稿を作る時から始まるこいふも既に晚い。一年三百六十五日を通じて、お箸を持つて食事をしてゐる時、横になつて

枕に就いてゐる時から、既に始まつてゐなければならぬのである。それが却々さうは行き兼ねるので、何事も得て一時的になりたがる、臨機應變的に陥りたがるのであつて、例へば體育といふことが盛に唱へられるけれど、併し其の體育といふものが兎角折々の御馳走に過ぎないで、容易に常の食物にならない。我々は、折々の御馳走では恐らく反つて健康を損じてゐるのであらう。御馳走は食べ過ぎる。ヤレ體育大會であるとか講習會であるとか言つては飛び廻る。急に激しう飛び廻るが爲めに、ヒヨツとするこ反つて體を痛めるこがないこは限らぬ。唯針の尖だけでは何の力にもならない。我々が幸に健康を作つて行くのは、此の折々の御馳走ではなうて、常の食物にあるべきである。それは粗食でも構はぬ。些かな實行、僅かな心がけても構はぬ。此の些かな實行此の僅かな心がけの積もり積もる所に、鐵全體が尖端になつて動く所以のものが現はれる。これを思ふこ、昔の人はよく考へたものと思はれる。口では左程體育々々と言はなかつたかも知れぬが、人に知らさない間に、聲ではなうて其の實をば巧に日常化して、一年三百六十五日の中に取り入れてゐた。高い山の上には何處でもよく神社佛閣が祀られてゐる。これは世間の人に自こ登山を勧めたものである。いつれの氏神の社頭にもよくお百度石なるものがある。これ

は全く徒歩を取り入れたものであらう。

四

修養なき、いふこも全くそれであつて、タマの講習やタマの聽講なきは要するに針の尖だけにしか當らぬ。大切なのは一年三百六十五日を通じての不斷の心がけに實行にある。

栗畑の雀を追ふて

一

路傍の雀は追ふて通るこ。これは一日一善の心懸けなのである。折角作り上げた粟や稻の穂に雀が簾つてゐる。ホーイと聲をかけ手を拍つてそれを追ひ拂ふに別に理窟はないらしい。併し少しく考へて見たならば、私共は全體何の見る所あつて雀を追ふのであらうか。折角作り上げた物を、ミスく雀に食はすこいふは實に勿體ないこいふのであらう。勿體ない、併しそれは雀が永の夏中一度も草採りもしない、水も引かないで置いて、全く人の手で出來上つてゐるのを、横合からソツト出て來てそれを取らうこするから物議が生じるので、若し此の雀が、初めから自分で

稻を作つたのであればそれを取らうが、それを食はうが、それに對して別に異論のあらう筈はない。要するに雀が働かぬからである。働かぬからそれで追はれる。が併し、働かないで置いて、横合からソツト出て来て出来上つてゐるのを啄まうとするもの、何ぞ獨り雀に限らうや。ヒヨツミすれば私共も亦同じく雀の類ではないであらうか。私共に果して大きな聲で雀を追ふだけの資格が存してゐるであらうか。

二

朝起きて見れば御飯は早やお臺所に用意されてある。自分が早起して、磨いて飯を炊いて、碗に盛つて飯臺に載せたのであれば、詰まり自分の手で御飯を作つたのであれば、それを食べるに何の遠慮も何の氣もなしに食べた所で異論はあるまい。併し自分は米一粒も磨きはしない。御飯は全く他の手に依つて出来たのである。然るに是をば少しも有難いとも勿體ないともこれでは濟まぬとも思はないで、唯漫然とお箸を執るこいふこは、お負けに今朝の飯は硬いとか柔か過ぎるこか言つて苦情を並べるこいふこは、雀が横合から出て来て、ソツミ穂を啄まうとするのこ、ドコがドレ程異つてゐるだらうか。ソコには早や床が敷いてある。自分の手で敷いた床ならばそれ

でよいかも知れぬが、他の手で敷かれたものであつて見れば、これは有難いこれでは濟まぬと思はないではゐられぬ筈であるにもか、はらず、それをさうとも思はないのは、ヤツバリ雀も同類であると言はねばなるまい。私共はよく書いたり話したりする。併しその書いたり話したりするこが、一々自分の頭で作り上げられたものばかりではあるまい。然るにそれをば、誰々の説に依ればこか、コレ／＼の書物を讀んで見ればこか、出所を明かに斷らないで、それが如何にも自分の考へであるかのやうな顔をするこいふのは、これもヤツバリ横合から出て来る雀の仲間こ一つであると言はねばなるまい。ドコに私共に雀を追ふだけの資格があるか。

三

雀に食はずは勿體ないが、私共が食ふのは勿體なくないこいふには、それ相當の理窟がなくてはならぬ。成程雀は尊い米や粟を食つて、それに酬るだけの働きを爲し能はぬであらう。唯徒らに米や粟を殺して其の生命を捧げさせたばかりで、自分自身は一向他の爲めに死し、他の爲めに捧ぐる生活を少しもしないであらう。若し、それで雀に食はずは勿體ないこいふのならば、然らば私共は平素雀と異つてドレ程他に捧げてゐるか。禪家の或經文に食事の五觀念が説いてあ

る。其の中の一つに、此の尊い御飯を頂く所の自分は、平素ドレ程の立派な行をしてゐるであらうか。此の尊い御飯を頂いて、さて自分は今後如何な立派な行をしようとするのであるか、さお箸を執る前に宜しく觀念せよとある。私共は獨り粟や米ばかりではない。僅か一日を生きて行く上にも、數知れぬ程澤山な物の命を取つてゐる。前後左右から生命を捧げられ通し供養され通して私共は初めて生きてゐる。その私共が然らば自分自身は果してドレ程他に捧げてゐるか、ドレ程供養してゐるかを顧みたらば、或は唯徒らに他に捧げさせ、唯徒らに他を殺してゐるだけに過ぎないのではあるまいか。他を踏臺にしてはゐるが、他の踏臺には一向なつてゐないのではあるまいか。雀をして言はしむれば、オレに食はすのが勿體なければオマへに食はすのも亦同じく勿體ないと言ふのではあるまいか。唯漫然と雀を追ふてゐるもの、少しく内に顧みて見たならば、私共に果して雀を追ふだけの資格が存するかを氣遣はれる。

ステツキを庭に探りて

一

最早二十幾年の昔になつた。半年程を東京に客こなつてゐた際、途中で一度國に歸つた。道伴は郷里の友で徴兵適齡の早稻田學生であつた。京都に下車した。丁度花の四月であつたので「時は平治たり地は平安たり我は平氏たり」に眞似て、時は春たり所は京都たり我は青年たりなご、一生を隠居染みて格別青年期もなかつたらしい自分も、滝流二三日に及んで、きのふは東山今日は西山へこあそんだ。嵐山で友も自分も一本の櫻の木のステツキを求めた。友のは細くて體裁よく如何にも若い者向きであつたが、自分の求めたは甚だ頑丈なものであつた。實は内心國の老父への土産とする積りであつた。(其の當時でさへ既に老父と思つてゐたのであるが其の老父今尚ほ健在で今年八十五歳に達する)其の後五年経ち八年経つてゐる内に、其の櫻のステツキも、追々皮が剥けて、數年前から皮は少しも残らないで、全く木質ばかりになつたまゝ、今尚ほ庭の隅に凭れてゐる。

二

皮が全く取れて木質ばかりになつた二十幾年後の今日でも、私はまだ一向にステツキなるものを手にしない。曾て阿蘇山に登つた際、「登山の友」を求めて記念の爲に持つて歸つた。一日そ

れを手にしてゐる。親しい一人の友が傍人を顧みて、到頭ステツキを持つたぞ、と笑つてゐた。素手では淋しい、如何にも手持不沙汰に感じられる、ソコでステツキを持つ。併し何時も大きな風呂敷包を拘へてゐるものは、一向に淋しくない、少しも手持不沙汰を感じない。ステツキなごを持つて反つて邪魔になる。上位の人は姑く論外である。左右の村の青年を見て見ると、さうも餘り書物なごを持たないらしいものが、得てステツキなごを持ちたがる。何にも持ち物がなから淋しい。ソコでステツキを持つて自ら勢をつける。ステツキを持つてミイクラか元氣づくものに見える。従つて若しかするに自分でエラソーに見える。いつか町村青年團長會議が開かれた際、今年新に選舉された團員互選の團長數名の中、三人まではステツキを突いてやつて來た。新に團長といふ風呂敷包を持つたのであるから、これまでは例餘計な物を持つてゐたにしても、既に風呂敷包を持つたからは、反つてステツキは手から離れさうなものやと思はれるけれど、さうでない所を見て見ると、其の持つた風呂敷包がドレ程重いといふことを感じてゐないのであらう。或は又、團長になつたからエラクなつた、エラクなつたからエライ人の眞似をしようといふのであるかも知れぬ。

三

ステツキの五本や八本、それが何の事がある。ソナナ些かなせ、こましいことは言ふものではないものであらう。併し、蛇は卵にて殺すべし。徒長枝らしいものは芽の内に早く摘むがよい。青年期には生氣が強いだけ兎角徒長枝が出易い。特に村にある青年には一層徒長枝が出易い。彼のステツキを打ち振りつゝやつて來てゐるのを見て見ると、惜しいことには、アノ打ち振るステツキの尖から眞の元氣が遁け去つてゐるかのやうに思はれる。なぜにジツト口を閉ぢ手を閉ぢて神氣の散逸を防がないのであらうかと思はれる。吉田松蔭先生の書き物に、

平時喋々臨事必啞、平時點々臨事必滅。

八十送行 諸友有拔劍比又聞暢夫在江戶斬犬之事是等の事にて諸友氣魄の衰萎の由を知るべし。

平時は大抵用事の外一言せず、一言する時は必ず温然和氣婦女子の如し、是れが氣魄の源也。慎言謹行卑言低聲になくしては大氣魄は出づるものにあらず、張良鐵錐當時の面目を想ひ見るべし。

云々がある。ステツキを振り廻すなごは、『喋々』『點々』の形に似てゐる。ステツキを打ち振りつ、よく路傍の草木なごを打倒す。それは丁度『斬犬之事』に當つてゐるであらう。是等の事にて諸友氣魄の衰萎を知るべし戒められてある通り、人の心は微妙の間に色々の方に趨るものであるから、何事も細心の注意が大切である。

五 衰

樹木に五衰の説がある。

先づ第一には其の懐の蒸ることである。樹の勢氣壯んにして枝をさすこと繁く葉を持つこと多ければ、やがて風も日も其の懐を通らぬ勝

ちとなり、氣塞がり力間へて自ら葉も落ち枝も枯れ、いつとはなしに外部の鬱蒼たるに似す内懐蒸れて空疎となる。

樹の勢はいつも壯でありたい。併し世の中に將校級ばかりが多くて、下士級が之に伴はなかつたならば、折角の將校級も其の用をなさない。又何が故に枝葉のみ繁茂するであらうか。一つには幹に位せるものが上を牽制することが足りない。換言すれば幹部が適當に下情を上達しない

からである。下情は一々上意に副ふものばかりではない。然るに、上の機嫌を取らうとするものは忠言を避ける。上小材を求むれば臣大木を濫伐し、上魚を求むれば臣谷を乾かし、上揖を求むれば臣船を致すこある如く、上の意は迎へ易いものである。ソコで上の者が増長する。

第二には梢止りなり。樹の高さは樹下に健やかなれば限り無かるべきが如くなれど、根の水を送り上す力も、幹を保ち持つ力も極まる所ありて其所に盡くれば稀有の喬木も、其高さ三百

尺に超ゆるはなしと聞く。まして常の樹は數年或は數十年或は數百年にして、梢止りとなる。よろづの樹梢止となれば生長の機そこに轉じて幾程もなく衰を現す。

幹の水を保持する力が極まれば梢は自ら止まる。樹木の成長は幹の成長であつて、幹が成長を止める時、樹木は成長を止める。幹部は全く其の全體を支配する。

幹は何故に水を保持する力を持たないであらうか。それは適當に上意を下達し下情を上達しないからである。幹にして幹たるの作用を見せば、幹は常に太つて行く。太るによつて益々其の作用を見はす。

其の三は禿廢なり、松樅杉檜など天に冲するものはあれど、地に近き枝葉の何時とはなしに枯れて、長幹獨り空に聳ゆる状恰も竹の幹の如

きものあり、野中の一本杉などは禿廢となれば暴風雨の爲に倒され易く、多くは外來の障害に因りて枯衰するもの多し。

幹によつて體を成す。併し幹だけでは勿論樹木は成立せぬ。上意を下達せず、下情を上達せず、上の爲を思はないで、又下の爲を謀らんで、唯自分獨りさへよければよいものでは、やがて幹の破滅である。共存で初めて共榮である。共存はよく上に接しよく下に觸れることである。

其の四は梢枯なり、梢の止まりたるは尙可なり、梢の枯るとに至りては、其の樹の命數既

に危し。

梢が枯れることは幹が枯れるの謂である。幹が枯れ、ば其の樹木の命數は全く盡きる。何故に幹は枯れるか。幹たるの資格を失へば即ち枯れる。幹たるの資格を得て、常にこれを保つことは、一に不斷の修養と日々の心懸けに待つ。

第五には蠹附なり。油蟲は嫩芽に付き、貝殼

蟲に附かれては樹も天壽を得ず、十分に生長するを得ずして枯る。

蟲は葉にも枝にも付き、恐しき鐵砲蟲は幹を喰

ひ通し、毛蟲根切それらの禍をなす。此等の幹は堅い。幹部は堅いのを尊ぶ。身體は頑丈でなくてはならぬ。精神は鞏固でなくてはならぬ。世には種々の誘惑がある。誘惑は外魔である。人心は常に動搖してゐる。動搖は内魔である。酒色を見る、酒色は外魔である。心に兎や角思ふ、これは内魔である。外魔外から窺ひ、内

魔内から應じて内外手を執る所に自己の破滅がある。内外の交通を遮断して、内魔と外魔とを接近せしめないのは意志の力である。幹は堅い、しかも鐵砲蟲といふ強いものもゐる。樹皮を硬くして之を防ぐには幹部は常に品行を慎まねばならぬ。

中の字

字書によつて更に中の字に就いて見るに、

まんなか。かたよらざる性情の徳。至正和順の道、過不及なき善誼。天地の正氣。すなほ。なほし。ひこし。たゞし。よろし。たふ(任)。よし(可)。なかば。をさまる(藏)。みつ。うがつ。關與す。あたる(的)。かなめ。なかごろ(仲)

なご、ある。成語としては、

中正(禮記に、言必先信、行必中正)中立(中庸に、中立不倚)中行(論語に、不得中行而與之、必也狂狷乎)中典(苛ならず寛ならず、中庸の法則)中和(中庸に、致中和、天地位焉、萬物育焉)中直(史記に、中直空虛)中酒(酒醕なり、醉はず醒めず)中矩(規則にはまる、禮記に、周旋中規、折旋中矩)中庸(偏せ

さるを中といひ、易らざるを庸といふ、中庸に、君子中庸小人反中庸中堅(大將の本陣、中軍は軍の主將のある所にして、守備最も堅固なればかくいふ、後漢書に、光武與三敢取者三千人、御其中堅)中歳(吉凶の間にある年)中繩(すみなはによくあたる、荀子に、木直中繩)なごがある。

相戀ふべからず、相戀ふればその心を繋ぐ。戀はざるべからず、戀はざれば情相離る。戀欲と不欲と、その中道を得れば可なり。——動靜その中を得んと要すべし。然る後に常を守り分に安んずべし。(道教)

四 其の將來

キリストも亦幹部

無學の學者は幹部である。『非僧非俗』は幹部である。親鸞上人の所謂『御同朋』『御同行』は、下から離れない心懸けであつて、『如來の御代官をまうしつるばかりなり』こあるは、亦上から離れないものである。親鸞上人は幹部である。『唯一の神あり、又神三人との間に唯一の仲人あり、人なるキリスト、イエスこれなり』(ゴロー)こ。然らばキリストも亦幹部である。『人間が教育を受けるこは生得權である』。ルソーの斯うした大號令を近く引き寄せて、『弱きものは我が友である』こ人類學の體驗者として、一生を終始したペスタロチは亦幹部である。

親鸞上人終には佛

幹部はやがて指導者である。下士はやがて將校である。キリストは終に神であつて、親鸞上人

は亦終に佛である。眞の學者は恐らく無學の學者なのであらう。

元來同格

併し、指導者が優つてゐて、幹部が劣つてゐるこいふのではない。元來紙面あつての骨、骨あつての要である。要は骨に紙面を相待つてこゝに扇子の體成る。下士あつての將校、將校あつての下士、將校も下士も兵卒も、軍隊といふ體を作る上にあつては元來同格である。姑く體統組織の上から見て、上位又は中位下位といつてゐるに過ぎないで、其の價值的、道德的の上から見れば初めから何等優劣の存するものではない。

諸器官を著せしむ

既に中位が斯うであるとするれば、誰がこれに當るも少しも役不足はない。然るに、人は總じて中位よりも、上位下士よりも將校を望む。君は終生を下士級で暮せしはれるこゝ、誰もが快くは受けない。これは無理からぬこゝであつて、世間的に所謂立身出世とは、多く體統組織の上

に於いて下位よりも中位、中位よりも上位に就くこゝなのである。

さらば、下位よりも中位、中位よりも上位を優つてゐるこゝを定めて、誰も宜しく上位に就くべきものとして、さて其の上位は中位のツイお隣りなのである。下士から將校への途は既に開かれてゐる。幹部の完成する所に、自ら指導者が見られる。「幹は枝葉及花の諸器官を著せしむ」こゝあるはこれであつて、幹部は決して釘着けではない。前途は全く多望なのである。

左も亦一幹部の小品文である。

「明方」を求めて

一

今年はごちらが「明方」かな、こ奥の間の炬燵にあたつてゐる老人が尋ねてゐる。古い曆(陰曆)を手にして見るこゝ「大陰のりの方、此方にむかひてさんをせず、歳刑亥の方、此方にむかひてたねをまかず、歳破みの方、此方向やぎがへせず、船のりはじめす、歳殺いぬの方、此方にむかひてよめをこらす。豹尻うしの方、此方向大少便せずちくるいもこめす」なごこある。然るに、

斯様に八方塞つて手も足も出されないやうな間からも、屹度一方だけは明方が置かれてある。今年の子丑の間が『明方』であるか、申酉の間が『惠方』であるか記されてある。

二

所謂『明方』とは何の謂であるか。事志に違ひ易く、世事意の如くならぬもの十中の八九。斯うして人は呻いたり泣いたりする。併し、いくら吾れこそは不幸者よ、取り残されたる憐れな者よなきご自ら思つてゐる者も、其のいづこには屹度一道の血路を與へられて此處から伸びよ、此處から生きよ『明方』を置かれてゐるものである。

三

捨てる神があれば、拾ふ佛がある。若し、捨てる神があつて、捨てる佛があるのならば、それは全然八方塞りである。いかにも不幸者、憐れな者に相違はあるまいが、一方に捨てる神があれば、一方に屹度拾ふ佛があるものである。所謂逆境の恩寵は全くそれを謂ふものである。舞子の濱に生み付けられた松は、養分の乏しい砂原に置かれて、しかも朝から晩まで嵐に揉まれてゐる。決して順境に育つたものにはいへぬ。然るに天道は決して不公平ではないので、そこにも

『明方』を與へて、あの枝振りのよい風雅の松の樹を作り出させてゐる。

四

曾て山陰線の不原驛に下車した。そこには附近三箇村に跨つて凡十二三萬坪の荒蕪地が横はつてゐる。麥を仕付けても育たない。桑を植ゑても伸びない。荒蕪地其のものから見れば、自分こそは眞に世に捨てられたものご観てゐるであらう。併し麥も桑も出来ない其の荒蕪地は、普通品で一坪四拾錢内外、上等品で五拾錢内外の芝草を産出してゐる。見れば倉庫の附近は打ち取られてゐる芝草が山の様に堆く積み重ねられてゐる。一度打ち取つたあこは、五年もすれば又立派な芝になる。斯うして殆んど無盡蔵に産出される。平均一日に一貨車づつ積み出してゐるものご。此の荒蕪地にても果然『明方』があつた。

五

曩に英國労働黨内閣の成つた時、外國電報は閣員の素性を詳細に報じてゐた。首相兼外相マクドナルド氏、蘇國北部の水呑百姓を兩親とした彼は、幼にして田野に働いたが、好學心は夙に現れ、小學校ではその天稟の聰明を教師に認められて、助教を仰せつかた程であ

る。長じてさる倉庫會社の書記となり、志を立て、倫敦に出て夜學に通つて孜々として勉學しながら文筆を糊口の資としたのであつた。

大藏大臣スノーデ氏 父は毛糸編物を業とし無産者であつた。

検事總長 ヘイスチング氏 一時は鑛山技師をして居たことがあり、新聞記者もしたり、非常に苦學を経て來た人である。

商務院總裁 ウエソブ氏 至つて貧乏育ちで、子供の頃は一錢の金もポケットに持たなかつた。従つて正規の教育は一切受けてゐない。それでゐて著名な經濟、社會學者になつたのは、全く立志傳中の人である。

植民大臣トマス氏 九歳の時から勞働に従事し、後鐵道機關士として長らく煤煙生活を送つた。

陸軍大臣ウオルシュ氏 議員になる前に、ランカシャーの炭坑に働いてゐたことがある。代議士になつたは一九〇六年、趣味は讀書である。

遠い外國に例を求めなくても、一枚の卒業證書も持たないで、立派に所謂立身出世してゐる者は、私もそれです、俺もそうだよ、ミソコにもゐる、コ、にもゐる。雑誌の奮闘號はいつも賑はつてゐる。求めればソコに『明方』がある。求めることは精進である。精進は意志である。

認印を手にして

一

私は常に一つの認印を持つてゐる。今年で足かけ三十五年間使つてゐるので、最早縁が自然に磨滅して唯文字が見えるばかりである。既に印である上は、大きくても小さくても、皆圓いとか角さかの縁を持つてゐる。縁は例へば家を繞らしてゐる牆のやうなものである。牆あるによつてそれ以内は自分の宅地であることを示してゐると同様に、印の縁はそれによつて其の印の領域を定めてゐる。然るに縁のない印は、他から直に軒下まで侵入されてゐる趣きである。これ程小さな貧弱な認印は他にはあるまいやうに思へる。

二

併し亦見様を變へて見るに、此の縁のない印は、カナリ大きな豊富なものであるともいひ得ら

れよう。紙面に押して見る縁が見えない。其の見えないのは紙面が狭くて紙面の外に縁が出てゐるのであるかも知れない。或は机の外、居室の外、町村の外、モット廣く縁は本州四國九州の外に出て、全く全國を蔽ふてゐるのではないかとも見得られる。佐久間象山先生の語を引くも仰山過ぎるも、『余年二十以後乃知匹夫有繫三國三十以後乃知有繫天下四十以後乃知有繫五世界』と云々。此の認印は一國位に繫つてゐるのではないかとも云へる。

三

假りに此の認印は爾かく大きなものであるとして、さて然らば、如何にして斯様に大きくなり得たであらうか、如何にして縁が取れたであらうか考へて見るに、若し此の認印が途中で水牛の印材に轉職し、徒に水晶の印材に榮轉を欲してゐたならば、恐らく斯様に縁は取れ得なかつたであらう。此の認印はたしか一個拾錢であつた記憶する。甚だ粗末なものであつて、いはば何等學歷を持たないで、小學校しか濟んでゐないのでよく似てゐる。全く二十年三十年を通じて、孜孜兀々まことに根氣強くよく一途を辿つた所に、漸く今日の大が見はれたものを見ねばなるまい。

梅花の下に立ちて

一

出山の釋迦は、更に幾日かを菩提樹下に端座瞑目された。時は一見明星の端的臘月八日の拂曉、忽ち振ひ起つて『天上天下唯我獨尊』と叫ばれた。入山六年間は、蘇東坡の所謂『盡日尋春不復得』春、芒鞋踏遍隴頭雲『晋く外を駈け廻られたれど、何物も得られなかつた。』歸來閑嗅梅花立春在二枝頭『既十分』目を瞑つて今更ら内に氣附いて見られると、ソコに偉大な流れを發見された。

二

孔子の教には『天之命之謂性』とある。命は命令である。天の命令其のまゝを受け入れたもの、換言すれば天の延長したものが人の性である。人は初めから天徳を具備してゐる。人は元來天である。

三

基督の言に『我を見しものは神を見しなり』とある。基督は神である。併し神であるといふは、

父なる神であるといふのではない。恐らく基督自身の中に、父なる神が宿つてゐる。恰も一人の子供に就いて『若し彼を見たらんには彼の父を見たるなり』といふこと同様なであらう。基督は人である。既に人である基督に神が宿つてゐる以上、世間總べての人にも亦同じく神が宿つてゐるのである。『彼は我と同じく人にして、而も斯くも神の如ければ、もし我試みなば、我が現世の慾念を支配して、我が靈をば、我等が完全なる標準なる、キリストにまで高めえざらむや』と歌つてゐる。

四

所謂世界の三聖が、時を異にし遠く所を隔て、斯くも申合たかのやうに、人に價值づけるに、佛といひ天又は神といつてゐられるを承はるゝ、人は當初からして眞に尊いもので、夙に内に萬物を藏してゐる。『夜もすがら佛の道を求むれば、我が心にぞたづね入りける』(源信僧都)ともある。『父母も其の父母も我身なり、我を敬せよ我を愛せよ』(二宮翁)ともある。其の父母の亦其の父母に遡れば、ソコに天か神佛か存するのであらう。其の父母も我身なりであれば、我身は父母乃至天であり神佛である。

五

されば教育は引き出すこと。教育者は産婆の如しとある。産婆は自分が産むのではなうて、唯傍からそれを助けるまでである。吸上ポンプで水を吸ひ上げる時、上から迎へ水を注ぐと下から水が浮び易い。併しそれは浮び易いといふまで、水はどこまでも底から出るのである。産婆の手を借りるに産み易いと同様に、迎へ水を加へるここが便宜であるに違ひはないが、迎へ水の有無は少しも底の水の増減に交渉を有せない。既に佛性も神性も胎内に宿つてゐるのであるから、成るべく多くの教育を受けて、産婆の手を借りるに如くはないが、どこまでも自分で苦む覺悟さへあれば、終には自ら産まれ出るに違ひはない。

永遠の生命

幹部はやがて指導者である。此のやがては、追つつけの意味ではない。將校の口から發せられる號令は、其の實下士の進策に由るものかも知れぬ。中央の一角に勇ましく旗擧げされた其の旗は、或は地方から風呂敷包にしてソツト持ち込んだものかも知れぬ。眞の幹部はいつの間にか指

導者を兼ねてゐる。やがては即ちであつて、斯うあつて、たゞ世間的には中位であつても、價值的又は道徳的には其のまゝ、正しく上位である。唯忠實に自己の立場を守りたい、ソコに世間的立身出世の途がある。ソコに永遠の生命に通じる道がある。

幹部の修養（終）

附 録

地方に於ける幹部の養成

一郡一個所の高等小學校

私は明治十九年に小學校を卒業した。翌々年の二十一年に一郡一個所の高等小學校が設立されて、其の校長は生徒募集の爲め三里外の私の村にまで入つて、其の當時私は候補者の一人として、入校を勧誘されたものである。爾來三十幾年、三昔も四昔も経つてゐるので、無理のないことであるが、今日では中等乃至高等の學校は到る所に設けられて、孰れの學校も門前市を爲してゐるさういふ状態である。眞に隔世の感がある。

幹部教育と中等學校

併し、學校が増設され、教育愈々普及するこいふも、其の學校こいひ教育を稱せられるものは、多くは兵卒級養成の初等學校でなければ、將校級養成の中等乃至高等の教育に外ならぬ。元來中等學校は主として社會國家に於ける幹部を養成すべきものであらうやうに思へる。中等學校に於いて幹部を養成して、初めて上、高等學校の將校級教育も生き、下、初等學校の兵卒級教育も其の効果を完ふするのである。

然るに、其の中等學校なるものが、事實に於いては多くは高等學校の豫備校であつて、將校級教育の一部を成してゐる。其の然らざるものにあつても動々もすれば知識教育に偏するが故に、これが卒業生はたこひ幹部の地位に置かれても、幹部を以つて立たないで直に將校級になりたがる。

鳥高く飛んで

いくらか教育を受けるに、直に將校級になりたがる。親もそれで教育を受けさせた所詮があると思ひ、本人も亦立身出世したと思ふ。無理からぬこころではあるが、斯うして高等教育を受けた

ものはいふまでもない、中等教育を受けたものまでも、同じく鳥高く飛んで一般の群からは離れ勝ちである。町村は三十年経つても四十年経つても、土着するものはいはゞ兵卒ばかりである。下士がゐらない。そこへ將校が續々馬上に見はれて頻繁に號令を下す。

最初の巡回學校

私の居郡(広島縣沼隈郡)には、夙に郡立實業補習學校の設置があつた。明治四十二年郡青年會に於いて「公民教育講習規程」を作つた。翌四十三年同上規程の精神を受け繼いで郡施設の下に實業補習巡回講習會を開いた。翌四十四年講習會の組織を進めて終に郡立實業學校を作つた。明治四十年頃、公民教育なご、いふこころは、文字や言葉からして既に珍らしかつた。此の規程此の學校は時の郡長(阿武信一氏)の創意になつたもので、遙に例を外國の巡回學校に採つて、別に校舎を特設しないで、期間を定めて郡内各町村間に於いて、ソコの寺院コ、の青年會館内に臨時開校した。専務の教師は一二名で、他の十餘名は囑託講師として多く郡役所内の農業技術員又は郡書記郡視學なごがこれに當つた。校舎がないから經費も僅かで濟んだ。

十八歳以上

町村立實業補習學校は、補習教育の兵卒的教育である。郡立實業補習學校は、實業補習教育の下士的教育であるといふ立場に立つて、高等小學校又は町村立實業補習學校卒業生中から「思想堅實なる十八歳以上の農家の青年を選抜」して「將來其の町村に於ける農事改良の卒業者、地方改良の主動者となるべき中堅人物を作」らうと努めた。

吸口と雁首

併し、自ら學校を稱し又「幹部養成」を標榜するも、室内教授としては一日六時間づつ、三十日間これを行ふに過ぎなかつた。全く一種の講習會如きもので、所謂教育としては多寡の知れたものに違ひない。しかも此の間から相當の成績を挙げやうとするには、先づ素質の勝れた生徒を得ねばならぬ。次には不斷に卒業後の始末に注意せねばならぬ。

彼の煙管は大部分が竹である。併し吸口は雁首が金である故に、竹であつても役立つ。三十

日間の教育は畢竟竹に過ぎない。此の竹を役立たせるには、先づ雁首に相當する生徒に金を得ることに、吸口に相當する後始末を金にするに注意せねばならぬ。

- 一 卒業生をして一つ以上の研究事項を持たしめ、五個年間研究科に置き、時々會同し又合同視察などを行ひ、毎年二回以上同窓大會を開く。
- 二 時に印刷物を作りて、季節作物又は時事問題等に對する注意を與へ、平素勉めて卒業生と職員との間に信書の往復を爲す。
- 三 學校備付の書籍を貸出し、又雜誌十數種を備付けて班を設けて断えずこれを回覽せしむ。
- 四 卒業生凡そ五人をひと組とし、職員指導の下に各組に一冊の「巡回日記」を與へ、日々期して記入巡回せしむ。

なごのこころを行つてゐた。

優良児童

一方勝れた生徒は如何にして得られるであらうか。端しなく今更のやうに氣附かれたのは、小學校に於ける優良児童であつた。いづれの小學校でも、毎年の卒業生中二人や三人の優れた者がゐる。而して是等は十人が十人揃つて上級の教育に就き得るかといふに無論さうでない。折角の

地方に於ける幹部の養成

能力も一家の資力の供はらない爲めに、其のまゝ家業に留まる者も決して少くない。

町村に入營

今軍隊に就いて見るに、軍隊では毎年入營期に於いて、多くの入營者中から先づ上等兵の候補者を見立てやうとする。自ら養成して候補者を作るのではない、既に其の資格を有せる者を見立てるばかりである。而して、一般者同様に兵卒教育を施す間に於いて、いくらかの手を加へて、それ等の者から一人前の上等兵を作り乃至下士を得てゐる。今町村に就いていへば、町村に於ける四月は軍隊の入營期如きものであつて、小學校の門を出た者が相率ゐて町村に入營する。其の中に就いて、幸に幹部候補者を見立て得たならば、格別の施設を努力を要しないで、相當の幹部を得らるべき筈である。所謂幹部候補者は、優良兒童であつて進んで中等教育に就くに及ばないでゐる者これである。

五日間山寺に

ソコで色々考へた上、一齊に是等の優良兒童を羅致しようとして、漸く大正六年に到つて、先づ試に大正元年度以降のそれ等該當者を一郡一個所に集めて見た。出来る限り學校に入れた。然らざるものは校外生の制の下に維持留めた。其の年の冬十二月それ等の中から三十七名を得て共に飯米携帶で學校施設の下に五日間を山寺に籠つた。

日々に疎い

優良兒童の後始末は、獨り一地方の問題ではない。然るに、試に文部省刊行の『教育會諮問案答申集』を執つて見ても、此の後始末は中央地方にも曾て一度も議に上つてゐない。在校中は模範生徒よ優良兒童よ、賞與とか表彰とかに勉めてゐても、一旦學校を出した後は、遠ざかもあるのは日々に疎い。已むを得ないことではあるが、本人の不幸ばかりでない。社會國家が人材を教養する上から見ても、如斯は眞に遺憾のこころである。

不良少年と良少年

地方に於ける幹部の養成

不良少年があれ程大問題になつて莫大な金を投じられてゐるに拘らず、何故に一方不良少年に對しては、ソコにゐるかこもいはないであらうか、なご、思つて見た。

言葉をかけるだけの親切

小學校に於ける中等學校の入学準備の如きは、將校級を作らうとする教師の親切であり努力である。下士級を作る爲に在學中準備教育までは望まないが、せめては、立派な頭を持つて其のまゝ家に留まつてゐる折角それ等の立派な候補者がゐるのである、卒業後折には言葉をかけるだけの親切な努力がありがたい、なごと思つて見た。

五百五十九名

育英事業の設はある。しかし其の多くは中等教育の終つたもの相手である。

文部省最近（大正十二年度末現在）の調査に據つて見るも、育英事業の恩澤の下に中等學校に學べるものは、一千三百七十一名に過ぎない。十ヶ町村につき一人あまりである。一方其の筋に於

ける大正十二年度分の調査に據るも、全國優良兒童の數十八萬四千二十八名（一縣調査未済）内中等教育進學者六萬六千四百九十四名（三割六分強）に過ぎぬ。特に尋常科卒業だけで高等科乃至補習學校に就き得ない優良兒童が一府縣平均二百八十名。高等科優良卒業生で、補習學校にも入つてゐないものが一府縣平均三百五十一名、合計五百五十九名である。

方針さへ立てば

肩書ある者を作らうとするには相當金がかかる。幹部を作るには、これが方針さへ立てば、格別の經費、特別の施設を要しないで、恐らく相當の成績を擧ぐべき筈である。不良少年に對しては、百の努力を拂つて僅に二三の功果しか見得られないのとは反對に、良少年は既に立派な素質を持つてゐるのであるから、二三の努力に對して、百の功果を示すべきものである。

決して無理でない

折角伸びるべきものを伸ばさせないで、無理に郷里で下士的に服役させようといふのではない。

育英事業といふ醫師の來るまでを如何に處置すべきかといふ問題である。併し、強いていつて見れば、現に地方的人材がそれ程までに缺けてゐることをすれば、外に向はうとするものを勉めて内に引き留めて、終生を十室の邑に立派な人間として働かせることも、亦決して無理なことではあるまい。

此の兩者

幹部の養成は急務である。優良兒童の後始末は急務である。此の兩者は屹度結び付けて考へらるべきものであらう。



版權
所有

大正十四年六月十七日印刷
大正十四年六月二十日發行

幹部の修養

定價壹圓拾錢

著者 山本瀧之助
東京市四谷區霞丘十一番地
發行者 安原清太郎
東京市牛込區櫻町七番地
印刷者 本間十三郎

發行所

東京市四谷區霞丘十一番地

日本青年館

振替東京六〇七七八

日清印刷株式會社印刷

トツレフンパ館年青本日

相馬御風著 如何に樂しむべきか	東大助教授 文學博士 加藤玄智著 神道の宗教學的考察	山崎延吉著 農村文化と避	東大教授 文學博士 姉崎正治著 人生の三方面	東大教授 文學博士 桑田芳藏著 宗教心理
---------------------------	--------------------------------------	------------------------	----------------------------------	--------------------------------

定價30錢 送料2錢	定價20錢 送料2錢	定價20錢 送料2錢	定價25錢 送料2錢	定價25錢 送料2錢
如何に樂しむべきかにつき、社會人の立場から、例を擧げて眞の樂しみを説いてゐる。	神道を宗教として考察したもの、中で本書は新しい使命を果してゐる。	農村の人々農村を見限つて都會へと出て行く、經緯を詳述し將來如何にして農村文代を建設すべきを暗示す	この人生を一、本能、二、現世(知識)三、理想(信念)の三方面に分類して人生の意義を知らしめた所に特徴あり。	人間が宗教心を起す經過、個人的發達、社會發達を興味中心に平易に述べたもの

京東座口替振 館年青本日 丘霞區谷四京東
番八七七〇六 苑外宮神治明

トツレフンパ館年青本日

京大教授 法學博士 末廣重雄著 我國現狀と青年	文部省督學官 小出滿二著 農村問題	京大教授 文學博士 野上俊夫著 道徳發達史論	高橋刀畔著 佐々木信綱博士序 牧野英一博士序 最老農 檜垣仲次郎	相馬御風著 再生と死と愛
-----------------------------------	-----------------------------	----------------------------------	--	------------------------

定價25錢 送料5錢	定價25錢 送料2錢	定價80錢 送料4錢	定價50錢 送料2錢	定價50錢 送料4錢
國家の中堅たる青年の覺悟を力説したもので、憂國の青年諸君は是非一讀すべき書である。	農村問題の意義、デモクラシー、農村の將來と若き農夫、或功とは何ぞ其他九項に互つて農村問題を説く。	道徳思想の發達の歴史を博士の透徹した觀察で説いた興味津々たる好讀物。	隠れたる地方篤農家檜垣翁の傳成る農村への一大明星切に一讀を勧む。	北陸線糸魚川の邊り大自然のうちに靜に人生の問題を思索しつゝある著者の尊き魂の結晶若人の肺腑をつく

京東座口替振 館年青本日 丘霞區谷四京東
番八七七〇六 苑外宮神治明

隠れたる篤農家檜垣翁の傳成！ 現代農村への一大明星！！

文學博士 佐々木信綱
法學博士 牧野英一 序文 高橋刀畔著

賜天覽台覽

老農檜垣仲次郎

四六版全一冊
定價五十錢
送料四錢

高橋氏は千葉縣香取郡滑河町の篤農家で、はやくより農村の振興に意を致し、常に郷黨の先覺として、一光明たる位置にをる。檜垣翁は、近來稀れに見るの勤勉の士にして、しかも長い經驗から作物の多收穫法を創案し黙々として土に親しんで居る偉大なる老百姓さんである。高橋氏夙に檜垣翁を知ること深く、一の感激を以て筆を執り茲に此の一書を成したのである。しかも高橋氏は竹柏門下の歌人として文に達し行文自ら流麗一讀卷を措く能はぬ。

西川博士の手紙の一節

高橋氏著篤農家檜垣翁傳記誠に愉快に拜見仕候道の爲心を捧げたるその人の言行には自ら額かれ申候非常の感動を受申候爲皇后太夫大森鐘一閣下の御味讀を願候者折柄齋彬公傳記御書寫中にも拘す道の爲同じく一夜を割愛せられ快著の由御話有之小生も誠に嬉しく感入申候

279₃
49

終